
IS D A R K ~ 黒騎士伝説 ~

斎藤 君亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS DARK〜黒騎士伝説〜

【Nコード】

N4686U

【作者名】

斎藤 君亜

【あらすじ】

ISを元にした。二次作です。

原作が好きな人はお控えください。

ある日、ISの事件に巻き込まれた少年はそこで、ISを動かしてしまふ。

それから、一夏たちと共に数々の戦いをしなければならぬことに・・・どうなってしまふんでしょうか？

第一話 黒き伝説の始まり

俺は神阪^{カミザカ} 貴魅夜^{キミヤ}、至って普通の高校生のはずだったのだが・・・俺が今いるのはIS学園・・・いわば、“女子高”といっても過言ではない場所なんだが、俺はその生徒になっている。

唯一救いなのはもう一人、男がいることだ。名前を織斑一夏というらしい。まあ、正直、どうでもいい・・・。

問題はなぜこうなったかだ・・・。。。。。。。

「おお、青空！快晴！合格！・・・これほど良いことは他にはない！！！！」

叫んでいるのは恥ずかしながら、俺だ・・・。

その時は確か、受験の発表に来ていたはずだった・・・。そう、それだけだったのだ・・・。

「おい！伏せる君たち！！！！」

「へっ？」

確か、その時、IS同士の戦いが行われてたらしい・・・。正確にいうと、戦争らしい・・・。

ドゴーン。そこに、俺の近くにISが一機、落ちてきたんだ・・・。乗ってる人は重症だった。いや、そんなことはどうでもいいんだ・・・。そいつは俺と同じ年くらいだったんだ・・・。

とっさに声をかけてしまったんだ。そして、ISに触れてしまった。
。。。

『IS、基本動作確認、性能確認、現在の装備確認、可能活動時間
確定、行動範囲確定、センサー精度確認、出力限界確認、アーマー
損傷度確認・・・オールクリア。搭乗許可します。』

「えっ？」

そうこうしていると、気づかぬ内に俺は・・・ISに乗ってたんだ。

『オールクリア。フォーマツト初期化開始。フィッテング最適化開始。』

「なんだと!」

「はっ？」

遠くの声が聞こえる・・・いや、全方位が見える(・・・)・・・
身体が感じてる・・・これは、俺を認めている。

「いくぞ。えっと・・・。」

『黒式』

「黒式か・・・やるか。武装展開!」

『武装一覧：近接ブレード』黒夜』、遠距離弓』黒天』使用可能』

「『黒夜』展開!!!」

俺は『黒式』に『黒夜』を装備させ、突っ込む。

相手の機体名は『Un Known』と表記されていた。

「未確認でも、やるしかねえ!!!」

俺は『黒夜』を振るい、間合いを詰める……が、素人の攻撃が当たるはずも無く、避けられる。

「そんなものなの？坊や？」

「『黒天』展開。」

そう言うと、同時に弓を放つ。

「くっ……。」

今度は、避けきれなかったようだ……でも、まだ終わりじゃない。

今度は『黒夜』を振りかざし、間合いを詰める。

相手はそれを軽々避ける……が、斬られていた。

「なに!?!」

「それは、『黒夜』の特殊能力だ。『黒夜』の中心に音速の旋風かせを起すらしい。」

「嘗めた真似してくれるわね……この、初期機体が!!!」

そう言うと、相手の機体を中心に風が起こり始めた。

「ぐっ……。」

風が止む、それと同時に俺は斬られた……。

「なっ!?!」

「完膚なきまでに……壊す!!!」

「ちくしょう……なんだよ。あれ……。」

「『セカンド・シフト第二形態移行』も知らないの? ホント、無知ね。教えてあげるわ。これは……ISが進化したのと同じよ。」

「!!--!!」

「驚くのも無理ないわ。でも、それが真実。だから、消えて頂戴。」
すると、それは俺に向かい、台風並みの風の塊を投げつけてきた。

「うあああああ。」

「もっと、苦しみなさい! 私の『サイクロン・ファンク暴風の牙』で!!!」

そういうのが、聞こえた。いや、聞くのが精一杯だった……。俺は死ぬのかこんなところで……。こんな、一生で……。

『『初期化』終了、『最適化』終了……。『ファーストシフト一次移行』完了』

それも、聞こえた……。聞こえた途端、風を切り裂いた……。手に握る武器も変わった……。『黒夜 極型』に……。

「遊びは……。終わりだ！……。これからは、処刑だ。覚悟しろ！
！」

言った途端に、力が湧き上がる……。そして、フレームには『唯ワン・オー一アヒリイテイ仕様』の文字が……。そこには、『絶極零夜』とあった……。

「調子に乗らないでよ！！消えなさい！！！」

女は再度、『暴風の牙』を放つ……。が、俺の『黒式』には、関係無い……。

俺は、それを一太刀で切り裂き、発動させた……。『絶極零夜』を……。

その途端、『黒式』の周りを黒い霧が覆った。あたかも、深淵の闇の様に……。

「ヒィ……。」

短い悲鳴が聞こえる……。しかし、気にならない、俺は『黒式』で、『黒式』は俺なんだ……。そして、俺は振るった。ただ、振るった……。『黒夜 極型』を……。たった、一太刀……。それで、完全にそのISは機能を完全停止した……。

というのが、あったんだ。

実際、俺でも信じられないんだ。だけど、事實は事實・・・そこは良いんだ。

これは、拷問か？男子：2に対し、女子：29って、酷過ぎるだろ！！！！なあ！！！！

しかも、乗ってた女の子はこの生徒で、こっちをめちゃ睨んでるし・・・。誰か助けてくれ・・・。

「えー……えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

・・・。。。。おいつ、しらけてんぞ。一夏くん・・・。あつ、考え始めた。

それから、しばらく、考えていた。一夏の答えは・・・

「以上です」

ガタガタ、と、音を立てて、女子が何人か倒れたぞ！！！！大丈夫か？アイツ？

つて、めちゃ、困惑してるし・・・自分の失敗に気づけてないのか？そうしたら、アホだな。

んっ、一夏が殴られた・・・しかも、「げえつ、関羽!？」は無いと思うぞ。

そう思いながら見ていると、一夏が二回殴られ、女子が騒ぎだし、

あの先生が一夏の姉であることが分かった……。

「おいつ、その男子!」

「あつ、は、はい!」

「自己紹介をしろ!」

「あつ、はい。俺の名前は神阪貴魅夜です。趣味は音楽鑑賞と読書です。一年間よろしくお願いします。」

「お前もあれぐらいできるようにしろ。織斑。」

「でも、千ふ」

バシッ。

今日、四回目が響いた。

とりあえず、今日から俺の無駄にハチャメチャとした学園生活が始まるのだ……そう思うと、泣きたくなるな。

追記しておく、一夏は今日だけで織斑先生に7回は殴られていた。

まあ、同情の余地はねえけどな。だって、必須事項の本捨ててんだぜ。庇い切れねえよ。

「ここが、俺の部屋か……。」

俺はある、一室にやってきていた。そこは俺の部屋・・・一人か一人夏がいるか・・・さあ、どっちだ？

パンツ、ドアを開ける・・・そこには何とも開放的なリビングが・・・って、テレビ番組のナレーションか俺は・・・。

「しっかし、広いなあー。」

俺は、部屋を見渡していた・・・こういつときって、絶対、音、聞こえないよね。

「すまない。私は入浴中だったので・・・って、貴様！何故、居る！...！」

「へっ？」

そこには、ブロンドの長髪に黄色く、美しい眼を持ち、胸もDはあるって、俺は何を見てんだ！そう、女の子がいた。

「いや、こちらのセリフだ！！！！一人部屋だと、思ったのに・・・。」

「貴様、女の裸を見ていて何を言う！！！！」

「それについては謝る！！！！だけど、これは別だ！！！！なんで、俺の部屋にいる！？」

「こっちは、私の部屋だ！！」

「……って、ことは？俺とおまえの相部屋……って、ことか？」

「なぜ、そんなことに……？」

「俺が……知るかよ。」

「気まずい空気が流れる……いかにいかに、この空気はまずい、変えねば。」

「あんな……。」

「あの……。」

「妙なところで声が重ちゃったよ……どうすんだ……！俺……！！」

「この前は、その、ありがとう……。」

「えっ？」

「この前の襲撃された件だが……お礼すると言っているんだ……。」

「そのことか？きにするな……。それより、服を着てくれ……。俺は外に出てるから。」

「あ、ああ。」

二人とも、顔を真っ赤にし、それぞれの行動をとる……。

「いっよ。」

しばらくすると、声が掛けられた。

「お、おぉ。」

彼女は、IS学園の制服で、スカートタイプ立っていた。

「あ、あのさ……俺、アンタの名前……知らないんだが……。」

「わ、私か……私はシエリル……シエリル・ハミネス。」

「シエリル……か。よろしく。俺は神阪貴魅夜。貴魅夜で良いよ。」

「よろしく、貴魅夜。」

彼女は俺より背が低いため、必然的に上目づかいに……スゲー、可愛い。

「これからは、専用機持ち同士頑張ろう。」

そういって、手を差し伸べてくる。俺はその手を軽く握る。

「いちらこそ、だぜ。」

そう言って、俺はそっと、指輪になっている『黒式』に触れる……
って、こいつのは俺が盗ちやったんじゃ……。

言いたいこと察してか、説明をくれた。

「ああ、気にするな。私は新たな機体・・・『ガラスシア・レーベス』を買ったからな・・・。」

「そうか、良かったな。」

「ああ、それは元々は日本政府のモノだから・・・気にするな。」

「ありがとう・・・。もう、寝ようぜ・・・。」

「そうだな・・・。」

心なしか、暗い幕引きになってしまった・・・。

第二話 クラス代表決定戦

その日、いつもと同時刻に起きた。春休みには考えたことなかっ
たきれいな部屋と女の子……。それらが、起きた俺の寝起きを
出迎える。

「もう、食堂に行くか。一夏でも誘って……………」

俺は寝ているシェリルを起こさないように、ベッドから出て、着替
えた。そして、食堂へ向かった。
はずだった……………。

「どこ、どこ？」

見渡す限り、広い廊下。だが、案内板はどこにもない……………や
ばい、迷った……………。

「つて、俺は高一だよな！！なに、迷ってんの！！！」

頭を抱え、騒ぐ……………これは怒られる対象だが、んなことは気
にしていられない。例え、織斑先生の『出席簿アタック』をくらっ
てもいいぐらいに混乱していた。そして、くらっても気にならない
状況だった。

バシッ。

「いつてー！」

「黙らんか。少しは。」

そこには、鬼が立って……バシィッ。

「痛すぎる!!!!」

「誰が鬼だ？」

「読心術？」

バンッ。

「教師への口のきき方か？それが？」

「すみませんでした。織斑先生……。」

「分かればいい。」

「あの、一ついいでしょうか？」

「なんだ？」

こうなったら、恥も外聞もカンケーねえ！聞いてやんよ。聞いてやんぜ。

「食堂って、どこですか？」

………。うう、沈黙は駄目なんだよ俺は。

「はぁー。ここを戻り、最初の階段を下りて、右側だ……。」

「ありがとうございます。」

「分かったら、さっさと行け。」

「ハイ！」

よっしゃ、やっと、着いたぜ。食堂に。なに食つかなく。

あつ、言い忘れたけど……織斑先生の『出席簿アタック』は混乱してても、気になる。いや、むしろその威力に逆に混乱する。それは請け合いだ。……まあ、んなことよりは飯だぜ。

「あの、日替わり朝食ください。」

「はいよ。」

メニュー見ても分からないから、日替わり選択……俺って、無難ー。

しばらく、待っていると、三人の女子が登場。

「あつ、神阪君だ！……一緒にご飯食べよ。」

「カミザ〜。一緒に〜飯〜。」

「いいよね。」

「ああ、いいぜ。(断る意味がないしな。)」

「「「ヤッタ」「」」

んっ？小さかったから聞こえなかったな声が……。それと、カミザ〜って、俺？

「日替わりの人〜。」

「あっ、ハイ。」

俺は走って取りに行く。

今日の日替わり、鮭の切り身（焼き魚）、ホウレン草のおひたし、わかめの味噌汁、ご飯。うん、健康に良さそうだ。

「うわ、すごい食べるんだね。」

「男の子だね。神阪君。」

「ああ、女子にとつちゃスゲー重そうに見えるけど、これくらい食わねえと身体がもたなくてな。」

「そうなんだー。」

「そうなんだよな。」

「「「へえー」「」」

三人で揃えなくても、良いとも思うが……。

まあ、しばらく談笑して、俺たちは授業を受け始めた。

しかし、ホントにすごいな敷地はめっちゃ広いし、食堂はマジ美味しい、言うことねえなIS学園。

三限目、山田先生ではなく、織斑先生が教壇に立っていた。

「この時間は実戦で使用する武器の特性を抑えてもらうが……その前に、クラス代表を決めたいと思う。」

「先生、クラス代表って、具体的に何をやるんですか？」

女子の誰かが聞いた。まあ、恐らく一夏のためだけど……。

「簡単にいうと、学級委員だ。委員会や、生徒会会議。様々なものに参加してもらう。自薦他薦は問わん。誰かいないか？」

「織斑君が良いと思います。」

「私は神阪君を推薦します。」

えっと、ちょっと待て。俺が一夏？ざけんな。他当たれ、他。

「この二人以外いないのか。いないなら、この二名で多数決を執るが。いいな。」

「ちょ、ちょっと待った。俺は嫌です。」

「同じくです。」

そう言う、がすぐに織斑先生は俺らを論破する。

「他薦されたものに、拒否権はない。二人とも座れ。」

「くっ……。」

「待つて下さい！納得いきません！」

そう言い、さらに机を叩きながら、話すのは確か……イギリス代表候補生のセシリア・オルコットさんだっけ……のはずだ。

「そのような選出は認められません。大体、男がクラス代表なんて、いい恥さらしですわ。」

ちよつとイラッ、とくんなこの女。だが、我慢だ。我慢しろ、貴威杜。

「実力でいえば、私がクラス代表になるのは必然。それを、珍しいという理由からこんな野蛮なサルたちにやらせるなんて、納得いきません！」

ほう、俺らはサルか……人間以下か。そうして、ふと、一夏を見ると、一夏も怪訝そうな顔をしていた。

「大体、文化としても後進的な国に住む自体がこの上ない屈辱ですのに……。」

ガタッ、ガタッ。

椅子がこすれる音が二つ……俺と一夏だ。

「イギリスだって、大した御国自慢ないだろ。それを世界一まずい料理で何年覇者のつもりだよ。」

言ってから、一夏は後悔するような顔をしていた。

まあ、セシリアが肩をワナワナと、振るわせていたからな。でも、俺も言うことがあるんだ。

「一夏の言うとおりでせ。代表候補生だが何だか知らんが、その物言いは気に入わねえからな。」

「いいでしょう。」

俺と一夏の言葉を聞いた後、机をバシッと叩き、言葉を繋ぐ。

「決闘ですわ。」

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい。」

「同意見だ。面白そうだな。」

「んで、ハンデはどのぐらいつける？」

………。クラスは一瞬静まり、そして、爆笑の渦を生んだ。もちろん、俺もその一人だ。

「い、一夏………プハッ………ハンデは、むしろつけて貰う方だろ？俺らが……。」

「あつ……………」

俺がそう言つと、やっと、自分の失言に気づく。

そりゃそうだ、今現代の世の中で男女差別戦争が始まったなら、俺たち男は恐らく三時間で制圧されてしまつたろう。ISはそれほどまでに従来の武器と次元を一線している。

「むしろ、私がハンデをつけるかどうか迷つくらいですわ。ああ、それとも、日本の男性はジョークでそのようなことを言つのですか？」

「悪いが、少なくとも俺は言わない。だが、ハンデもいらぬ。」

「俺も……………ハンデはいい。」

俺と一夏は堂々とした態度で、ハンデはなしで良いと明言した。

そうすると、

「えっー、代表候補生なめすぎだよー。織斑君、神阪君。」

一夏の隣の女子がそう言ってきた。

「男が一度言いだしたことを覆せるか。なあ、貴魅夜！」

「ああ、んっ、そうだな。」

俺の方に顔を向け、そう言ってくる一夏……………だけど、俺はもう座って、寝る姿勢に入りかけていた。

「本当になめてますわね……………」

「いや、これでも緊張はしている。だが、勝負するのは決まったも同然だ。その状況下で寝るのが悪いか？」

「ああ、悪いな。少なくとも、私の授業を寝るなどとはざいたのはお前が初めてだ。神阪。」

しまった。今は山田先生じゃなかったんだ失念していた。

「では、一週間後の月曜、第三アリーナで勝負を行う。異存はないな。」

「はい。」

「では、山田先生。あとは頼まれてくれ、私はこの馬鹿を徹底教育する。」

「えっ、えっ……………」。ちよ、それ無理です。絶対、無理……………」。

俺は、その日、他の授業に出ることはなかった。

「た、ただいま……………」

「おかえり、大丈夫か。貴魅夜？」

うう、心配する声が聞こえてくる。でも、なんかほくそ笑んでないか？俺の気のせいかな？

「ああ、大丈夫かな？それより、シエリルに頼みたいことがあるんだ。」

「なに？それより、なぜ、疑問形？」

「ISの練習を付き合ってくれないか？」

「いいよ。私も貴魅夜と戦ってみたかったんだ。」

「んじゃ、明日からな。」

「そうしよう。」

一夏サイド

「なあ、箒」

俺は箒に精一杯話しかけていた。むろん、ISの特訓を付き合ってもらったために。

しかし、邪魔はどこにでも入るものだ。

「ねえ。君って噂の子でしょ？」

「はあ、たぶん」

三年の先輩が話しかけてきた。しかも、自然な動きで俺の横に座る。
・・・ワオ、機敏。

「でも、君って素人だよな？IS稼働時間ってどれくらい？」

「はあ、二〇分ぐらいだと思いますけど」

「それだけ！？それで、代表候補生に挑むの？無謀だと思うよ」

俺も、そう思うから言わないで欲しい・・・というか、どこかにISのことを教えてくれる人はいないのだろうか？幼馴染はやってくれないし、幸先悪すぎるよな。

「私が教えてあげようか？」

そうそう、そういう言葉がほしいんだよ・・・って、マジ、ラッキー。こつこつ、社交性？これについては俺は見習ってほしいぐらいだ。

「ぜひー。」

「間に合ってます。彼は私が受け持っていますので。」

へっ？俺さん？受け持っている？そんなの初めて聞いたんですけど？

「へえー。でも、私の方が年上だし、教えられると思うよ」

「・・・私は、篠ノ之東の妹ですから」

「篠ノ之つて、えええええええ」

「そういうことなので、お引き取り下さい。」

「そ、そういうことなら、仕方ないわね。」

さすがは、篝……だてに篠ノ之束の妹ではない……と
いうか、大体の人間が萎縮してしまうだろその肩書は……。
まあ、コーチがついたから安心だな。

「では、剣道場へ来い。なまってないか見てやる。」

「えつ、俺はISのこと……」

「いいな。」

「はい……」

前言撤回……どうして俺の周りの女子はこんなばかりなの？

しかも、それから一週間、剣道でしごかれただけだし……。
大丈夫か？俺？

貴魅夜サイド

俺と、シエリルは今、第一アリーナで特訓していた。

「いくぞ、『黒式』」

「いくよ、『グラッシア・レーベス』」

二人揃って、展開する。

ちなみに、俺の『黒式』は名前通り、黒がベースカラーで所々に赤のラインが入っている。ちょっと、いかつめの機体だ。

それに対し、シエリルの『グラスシア・レーベル』はイタリア製の第三代ISで、色はシルバーというのか、それがベースカラーで、ラインには青という、何というか清楚な機体だ。

「いくぜ。シエリル！」

「こつちこそ！」

俺は、『黒夜 極型』を持ち、斬りこむ。

しかし、シエリルはそれを避け、ライフルの『ムーンサルトHK38』を撃ってくる。

「くつ」

俺は、バランスを崩しながらもどうにか、弾を切り裂いた。だが、

「まだまだだね」

「えっ？」

完全な死角からの射撃。俺はそれをもろにくらう……ヤバイ、シールドエネルギーが170も減らされた。

不意をくらって、バランスを崩すが、それを軸とし、シエリルの方を向く。そして、

「『黒天』」

遠距離特化武器『黒天』を呼び出し（コール）し、瞬時に間合いを測定、照準を合わせ、撃つ。

それは、真っ直ぐに直進し、シエリルの機体の一部を削ぐことができた。

「まだまだ！」

すぐさま、『黒夜』を呼び出し、斬りにかかる。が、シエリルはそれを近接ブレード『シュレント・ダガー』で、受けきる。

「さすがね……でも、おしまいよ」

そう言うと、マシンガンを呼び出し、撃ってくる。それで、俺のシールドエネルギーは極端に減らされた。

「残量は………140か、くそ」

俺は、体勢を立て直し、すぐさまシールドエネルギーを確認する。そして、『唯一仕様』の表示を見る。どうやら、『絶極零夜』はある程度、シールドエネルギーを減らされないと発動しないらしい。

「どうしたの？まだ、やれるんでしょ」

「もちろんだ。いくぞ」

『唯一仕様：絶極零夜』発動。

そう、画面に浮かぶと同時に、いきなり辺りが深淵に染まる。

「いくぞ。これで、終わらせるからな」

「も、もちろん。全力で来なさい」

「『黒天』、リミッター解除。『穿つ深淵の雨』アビス・レイン」

俺が、そう言ったのか、『黒式』がそう言ったのか、『黒天』にエネルギーが集約、凝縮、解放の順を辿り、放たれる。しかも、それは無数に分裂……文字通り、雨になって、襲いかかっていた。

「ぎゃあああ」

悲鳴が聞こえた。だが、シエリルに傷は無かった。それどころか、『グラッシア・レーベル』にも、傷すら付いていなかった。

「どういうこと……こと？」

「どうやら、『絶極零夜』の能力みたいだな。」

「どういうことなの？」

「原理は分からないが、恐らく、エネルギー体のみを削り、奪う能力みたいだな。俺のシールドエネルギーが回復してるしな。」

「つまりは、相手の力を自分のモノにするということ……よね。」

「そういうことだ。だけど、問題もある。相手に触れなければならぬことと、『黒天』の『穿つ深淵の雨』は連発できない点だ。」

「なら、『黒夜』で、攻撃を当てればいいじゃない。」

「そうだけど、正直つらいな。シェリルと戦ったときに思ったんだけど、俺は圧倒的に遠距離相手に弱い。つまり、当てることは非常に難しいんだ。」

「得意げにしないで、頑張りなさいよ。」

「わかってる。それと、今日はありがとう。」

「い、いいわよ。別に……。」

そういつて、なんか甘い雰囲気になって、今日の練習は幕引きだ。正直、強すぎる力を扱うのには、俺はまだまだ弱すぎる。それに頼らなくて済むようにしなくちゃ、みんなを護るために。そう、思いながら……だけだ。

決戦当日

戦う順番は、俺対セシリア、俺対一夏、一夏対セシリアの順だ。

俺は一瞬で決めるつもりでやるけどな。

そう思い、シャッターが開くのを待った。戦闘開始の合図を……
・ただ、静かに。

「逃げずに来ましたのね。それは褒めてあげましょう」

「ご託はいい。だから……早く始めよう。時間の無駄だ」

「いいでしょう。私、セシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』による円舞曲^{フルツ}で終わらして差し上げます。」

言うが早いか、セシリアは俺に向け、ビームライフルの『スターライトmk?』で、撃ち始めた。

「遅い！」

俺は、撃ってくる軌道を読み、『黒夜 極型』を振りかざす。

しかし、あっさりセシリアは引き、射撃を続ける。悠長に構えている場合ではないのだが、あえて、その行動をし、ビームを弾く。

「なかなかやりますわね。しかし、これはどうでしょう?」

「!?!」

そう、セシリアが言った途端に俺はビームに撃たれる。振り向くと、青いビットがそこにはあった。

「」では、この『ブルー・ティアーズ』で、フィナーレといきましょう。
「」

「いや、もう終わりだ。」

「何を言ってますの？」

「『穿つ深淵の雨』」

あらかじめ、呼び出ししていた『黒天』を引き絞り、セシリアに向かい放つ。

「なっ!?!」

一本の矢は無数に分かれ、セシリアを『ブルー・ティアーズ』を貫いていく。もちろん、無傷で。

予想外だったのが、セシリアがそこを飛び出してきたことだった。

だが、それも終わる。この一閃で。

「はあっ!」

「!?!」

よそを向いていたセシリアに避けきれぬ訳がなく、俺が勝った。

時間にして、数十秒だっただろう。瞬殺だ。

次の試合だったはずの一夏対俺の試合は俺が不戦敗した。

理由は一夏の機体が届いてないのと、一夏には全力でセシリアに臨んでほしいという気持ちからだった。

「お、織斑君織斑君織斑君っ！」

「三度も呼ばなくても大丈夫だと思いますが。」

慌てた様子の副担任山田先生。うん、いまにもこけそうだな。見てるこつちが心配になるわ。

「で、どうしました？」

「織斑君の専用機が届きました！」

「本当ですか！先生！」

バシン。

「教師の言葉を信じるバカ者。それに、教師に対する言葉づかいでは無かったな。これからは気をつける織斑」

「は、はい・・・織斑先生」

ひどく整った家族勢力図だな。ある意味感動する。

「おいつ、一夏。勝ったら、なんか奢ってやんよ」

俺はそう声をかける。まあ、正直な話、結構心配なんだよな。セシ

リアはかなり強かったし・・・しかも、一夏のは恐らく、初期設定の機体が出てくるだろう。『初期化』と『最適化』が終わるまで、生きていられるかが勝負だな。

さて、お楽しみは観客席でシエリルと観るか。

「シエリル。悪い、待たせたな」

「そんなことはいい。始まるぞ」

「そう、みたいだな」

そこには、一夏とセシリアが向かい合い、というか、睨みあっていた。

なんとというか、一触即発の雰囲気だな。観てるこっちも緊張すると、そう思ってた矢先に状況が動いた。

「最初はセシリアか・・・」

「けど、織斑は武器も出してない・・・どういつつもり・・・?」

一夏はビームを肩にくらい吹っ飛ばす。あの様子じゃ、少ししか減らされてないのかな？

一夏は、開戦後からの攻撃をひたすら避けていた。まるで、踊らさされているように・・・マリオネットのように、地面すれすれを飛び、ビームを避ける。セシリアは余裕の表情だが、一夏はただ純

然に必死だった。

「あれじゃ、負けるぞ……あいつ」

「そうね。動きに無駄がありすぎる。あれじゃ、無理だわ」

二十七分後……

一夏サイド

「よく、持ちましたわね。褒めて差し上げましょう」

「そりゃどうも……」

正直、ボロボロだ。シールドエネルギーが67・実態ダメージ：中破。武器はかるうじて持てる程度……そう、かるうじて使えるだけだ。

「この『ブルー・ティアーズ』を前に、初見でこうまでたえたのは貴方が初めてですわね。」

「嘘つけ、貴魅夜は勝ってんだろ？そいつに」

「虚勢はお止めなさい。すぐに、楽にして差し上げますから。」

そう言つて、セシリアは自らの周りを浮遊する自律機動兵器……『ブルー・ティアーズ』……ややこしいから、以下、ビット。それを撫でる。

「では、閉幕フィナーレといきましょう。」

その声と、右手を横に薙ぐ動作一つでビットが動き始める。しかも、二機。それも、それぞれが独立した動きをしてくる。

二角からの攻撃に翻弄されていると、セシリアが左足を狙い、照準を合わせてくる。

「させるか！」

俺は、一か八か突っ込み、ライフルを弾く。そのおかげで、当たらずに済んだ。

「無駄な足掻きを……けれど、これで終わり」

セシリアは左手を横に振るう。すると、待機していたビットが動き出した……左……さっきは、右だった(……)。つまり、あのビットは手の動きに連動している(……)。

「分かったぜ！」

俺はそう言うと、放たれるビームを避け、一閃。一機を落とした。

「動きが変わった」

俺はそう呟いていた。それは、一夏の動きに起因する。先ほどまではがむしゃらに避け、攻撃していたが……今は違う。ビットのみ

に照準を合わせ、破壊している。

「動きが全然違う。まるで、別人」

「そうだな。でも、うまく倒せるかな。あれだけで」

「？」

「なんでもない。忘れてくれ」

「そうする」

貴魅夜が抱いた不安とは、一夏があのままやって、確実に勝てる保証はないということと、このまま好き放題やられて黙っているセシリアではないということなのだ。

(このまま、押し切る。)

自らの死角へ誘導して、ビットを壊す。そうやって、セシリアの『ブルー・ティアーズ』を一機ずつ壊していく。

(残り、二機。これを壊して、近接戦に持ち込めば勝てる!!!)

セシリアはライフル以外を展開しないでいた。それは、『待機状態』の武器がある可能性を誇示していたが、一夏には関係ない。もっとも、展開する前に間合いを詰め、斬れば、勝てる。そう、思い込んでいた。

残った、二機を狙い、刀を振るう。そして、その勢いを使い、回し蹴りで最後の二機を撃破する。

獲った。そう、思ってしまった。そのまま突っ込めば、ライフルも何も間に合わない。完全に無防備だ。そこで、突っ込んでしまった。

「かかりましたわね」

セシリアは笑っていた。俺の本能がマズイと、訴えかけてきたため距離を取ろうとする。しかし、それこそ終わりだった。『ブルー・ティアーズ』のスカート部分がめくれ、『ミサイル弾道型』が放たれる。

赤を通り越し、白色を帯びた爆炎に包まれた。

やっぱりだった。攻勢に余裕を持っていたためか、一夏は何も考えも無しに突っ込んでしまった。その結果、思い切りミサイルを受けてしまった。いわゆる、自爆だ。だが……。

「ブザーが鳴らない？」

「ということとは、まだ、戦える状況ということ？」

俺とシェリルの疑問を解くが如く、霧が晴れ、『白』が現れた。

(な、なんだ。)

意識がはっきりしている。フォーマットとフィッティングの終了？

訳も分からず確認を押す。すると、情報が流れ込んで、いや、違う。整理されていく、そんな感覚に襲われた。

「なんですか？ま、まさか、『一次移行』今までは『初期設定機体』だったとでもいうわけじゃ、ありませんわよね……」

「そうらしいな。これで『白式』は俺専用になったららしいな。」

手に握られている武器も変わっていた。『雪片弐型』へと。これは確か、千冬姉が使ってた武器……いや、型名。そういうことか。

「俺はつくづく、良い姉さんを持ったよ。」

「だから、俺も家族を護る。」

「何を言って……」

「まずは、名前を守ることからかな」

世界最強の弟なんだ。それが弱くちゃ、話にならない。

俺は、これから、もっと、色々なモノを守っていかないといけないんだ。こんなところで負けられない。

『雪片弐型』を握りしめ、振る。すると、剣先から割れ、エネルギーギブレードが出てくる。使い方は分かっている。負ける要素は……無い！

「さつきから、何の話ですの。もう、面倒ですわ。」

セシリアはそう言うと、ミサイルを放つ。俺はそれを『雪片弐型』で、斬り裂く。斬り裂くもミサイルは慣性の力で進み、爆ぜる。

「これで、終わりだあああああ！！！！」

セシリアに袈裟切りしようとしたら、ブザーが鳴った。

『勝者、セシリア・オルコット』

俺は、なぜか負けた……。

「アホか。お前は、持ち上げといて負けるとは、情けないにもほどがある」

「ごめんなさい……」

俺は、頭を抱える織斑先生と、ひたすら謝る一夏を苦笑いしながら、みている。

「ま、まあ、良いじゃないですか。ああ、お、織斑君これ、必ず読んでおいてくださいね。」

「げっ、何ですかこれ？『アナタの街の電話帳』ですか？」
「パアシイン。」

今日一番の音だった。一夏は痛さでうずくまっていた。

「バカ者。こらは、IS基本事項だ。電話帳じゃない」

「すみマセンでした」

「はあ、もういい全員下がね。そして、今日はもう休め」

「はい」

こうして、クラス代表決定戦は幕を閉じたのだった。

第三話 転校生は代表候補生で一夏のセカンド幼馴染(前書き)

久々の更新だー。まあ、原作ベースなんで楽ちや楽。なんですよね。そのかわり原作壊したら叩かれますけどね。(見えない人たちに) そんなこんなの第三話。読んで下さい。

第三話 転校生は代表候補生で一夏のセカンド幼馴染

「一夏がクラス代表になって、もう一週間だな」

「そうだな……。けど、貴魅夜……。何で辞退したんだ？」

「面倒そうだから」

「……。はあ」

一夏は深いため息をつきながら、俺と共に、実習のあるアリーナに向かう。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。専用機持ちは前に出て、試しに飛んでみせる」

四月も下旬、桜は散り、俺……。一夏も鬼教官こと織斑千冬先生（千冬姉）の授業を真面目に受けている。そして、今は実習中だ。

「織斑。早くしろ。神阪たちはもう展開しているぞ」

えっ？マジ！？あつ、本当だ。でも、貴魅夜は何であんなに上手いんだ？IS操縦。

意識を集中させるもできない。なんでだ？

しかも、ISは待機状態はアクセサリーになるらしいが、俺のは右腕にガントレット・・・防具じゃん。ついでに、セシリアのは左耳に青いイヤークラス。貴魅夜は右の中指に黒い指輪。えっと、誰だっけ？もう一人の女子は左手に銀色のブレスレットだ。うーむ、これは格差ではなかるうか？

「集中しろ」

いかん、次は叩かれる。

俺は右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。色々やったけど、このポーズが一番集中できる・・・というより、ISが展開されるのをイメージできる。

(来い、白式)

そう心の中でつぶやく。刹那、右手首から薄い膜が全身に広がる様に白式が展開される。約0.7秒のうちに、光の粒子が俺の体から溢れ、全体を包み込み、再結晶し、ISのボディが形成される。

「よし、飛べ」

そう言われて、セシリア、女子、貴魅夜、俺の順で浮上する。しかし、完全に出遅れたな。俺・・・。

「何をしている。スツペク上では神坂と同じ速度で動けるはずだ。神阪。お前も何やっている。もっと、速くできるはずだぞ。」

早速、お叱りを受けた。まあ、貴魅夜もだけどな。

でも、この角錐のイメージってどうなんだ？全く分からんぞ。

そんな俺を見かねてか。セシリアが『オープン・チャンネル開放回線』で話しかけてくる。

「一夏さん。所詮、イメージはイメージ。自分のやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そうだけ、俺もそのイメージが分からないから。空気を貫く感じつか、真っ直ぐ進む感じを意識したらできた。だから、あんま教科書を鵜呑みにしない方が良さぞ」

セシリアが（言ったとおりでしょ。一夏さん？）的な視線で見てる。ちくしょう、やってやる。

「一夏っ！いつまでそんなところにいる！速く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。たぶん、皆もそうだろう・・・可哀想に。それより篤、貴魅夜が苦笑いしているぞ。早く山田先生にメガホン返してやれよ。

「おい、全員で急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

（んじゃ、やってみっか）

最初にセシリア、シェリルが降りて行った。二人ともものすごく上手い。さて、俺も行くか。

「一夏、先行くぜ！」

俺は一夏にそう言って、加速する。そして、地面を目指して降りる。着く寸前に一回転してギリギリできた。というか、一回転してなきや激突してたな……。俺。ま、まあ、それはさておき。一夏のを見るか……。

簡潔に言おう。一夏のスピードは良かった。良かったが、地面に激突した。俺も一歩間違えばあなっていたが、大笑いしてしまった。もちろん、織斑先生に叩かれた。今日も痛いぜ。

「では、武装を展開してみる。それぐらいは自在にできるだろうな。織斑」

一夏は指摘されていた。だが、自信はありそうな顔で頷いた。すごいな。さて、俺もやるか……。

俺は手を開き、手の中に刀の柄が納まるのを想像した。それだけで、黑夜を手に来た。

「神阪。織斑。遅いぞ。それに神阪は戦闘中の方が明らかに武装展開が速いぞ。日常でそれをできるようにしろ。いいな」

いやいや、結構な具合で必死なんだぜ。これだって、一週間でできるようにしたんだ。俺と一夏は。褒めたっていいだろ。一夏ぐらいは……。

ばれない程度に溜め息をし、セシリアとシェリルを見る。それにしても、二人とも早い。時間にして、0.7秒だろうか？それだけで、セーフティを外し、射撃完了までしていたが……セシリア

のポーズはなんなんだろう？ 一体？

「さすがだな。代表候補生。だが……そのポーズはやめる。横に出して、誰を撃つ気だ。正面に出せるようにしろ。ハミネスみたいにな」

「し、しかし……」

「直せ」

「はい……」

不満そうな顔だな。だけど、織斑先生には通じないと思うぞ。

「セシリア、近接武器を展開してみる」

「えっ？ あっ……は、はい」

ありゃあ、文句言ってたな。頭の中で、そのせいで返答が遅れたんだろ。馬鹿みたいだな。

（あれ、セシリアって、近接武器出すの苦手なのか？）

俺がそう思った理由は、セシリアが名前を呼んで武器を展開したからだ。しかも、名前を呼ぶのは初心者用の手段だ。大丈夫か？ 代表候補生。

って、睨まれた。しかも、（貴方のせいですわよ）的な視線だ。俺

のせいかな？俺のせいなのか？

『貴方のせいですわよ』

おお、『プライベート・チャネル個人間秘匿通信』まで使ってきた。というか、

なんでだよ。

『あ、あなたが、わたくしに飛び込んでくるから……』

そりゃ、近接武器しかないISならそうなるだろ。

『せ、責任をとっていただきますわ』

なんの責任だよ。

一つ言っておこう。俺は通信していない。というか、やり方が分からん。なんだ『頭の右後ろ側で通話するイメージ』って、分かるか。頭の右後ろ側ってどこ？

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片しておけよ」

それって、あの穴、埋めろってことだよな。土どこだっけ？

「ほれ、土ならここだよ」

おおー、貴魅夜が持ってきてくれた。恩に切るぜ。というか、みれば見るほど逆だよな……俺の『白式』と貴魅夜の『黒式』……どうなってるんだ？

「じゃあ、先行くわ。頑張れよー」

ああ、行ってしまった。えっと、籌はつと。ガン無視ですか？セシリアは……いない！！はあー、分かったよ。一人でやればいいんだろ。というか、ただの自業自得だしな。

放課後

「来いっ！ー夏」

「くらえー」

俺とー夏は模擬戦をしていた。まあ、優勢は俺なんだけどな。

ー夏の雪片二型をそらし、黒夜極型で弾き、黒天で撃つ。さっきからこの繰り返しだ。言っておくが『穿つ深淵の雨』^{アビス・レイン}はもう使った。あれは撃つと一回でエネルギーの半分以上を食うからな。まあ、そのための『絶極零夜』なんだけどな。

「『黒天』」

武器の名を呼び、狙いを定める。

「撃たせるかー」

「残念だな。ー夏」

俺は飛び込んでくる一夏を避け、その頭上で矢を放った。見事に『絶対防御』が発動して、一夏のシールドエネルギーがゼロになる。

「ああ、負けたー」

「実際、俺もギリギリだったぜ。まあ、一夏ならあそこで突っ込んでくると思ったから撃てただけだな」

「計算づくかよ……」

「そういうことだ」

ちなみに現在の勝率は一位：シエリル（貴魅夜に紹介してもらって覚えた）、二位：貴魅夜、三位：セシリア、四位：俺。の順だ。正直、同じ初めてなのか？と、思うほど貴魅夜は強い。理由はIS襲撃戦に巻き込まれて、そこで戦って、そうしたらなんか、ISの気持ちが分かってくるようになったらしい。羨ましい限りだ。

「にしても、『穿つ深淵の雨』は強すぎないか？」

「ああ、俺もそう思う。だけど、もっとも強いのは俺の『唯一仕様』の『絶極零夜』かな？あれは、触れた相手のエネルギーを問答無用で自分のにしちまうからな」

「そうなのか。でも、今日は一回も使わなかったな。なんでだ？」

「自分の力だけで仲間を護りたい……からかな」

「困まれちゃうし」

「ほうほう。では、何故辞退したのですか？」

「面倒だから。ですかね」

「うーん、もうちょっと、ヒネリが欲しいな。よし、『織斑くんに惚れたから』で……」

「潰しますよ……新聞部」

「じよ、冗談ですよ。アツハツハツハ」

油断はできないな。よし、書いたら、本当に潰してやるぞ。『穿つ深淵の雨』使つてでも潰す。

「じゃあ、私は織斑君の方行くから。後、よろしくー」

あつ、体よく逃げやがった。

「あのっ」

「はい？」

「続き、いいですか？」

「ああ、どうぞ」

俺は逃げた先輩を睨む視線をやめ、インタビューに応じる。

「あの、専用機なんですけど……どのような経緯で手に入れたんですか？」

「ちよつと、言えませんね。聞いたら、監視がつきますがそれでいいならいいですよ」

「じゃ、じゃあ、いいです。えつと、先の戦いは素晴らしかったですね。よく、代表候補生を倒せましたね。で、その秘密とは？」

「あれは俺の力ではありません。黒式くしきのおかげです」

そう言つて、待機状態の黒式を見せる。

「はあ、そうですね。それでは、最後いいですか？」

「もちろん」

「最後ですが、気になる女性はいますか？」

その質問か……正直に答えてやるか。

「います」

「そうですねー。答えるわけつて……今なんて!？」

「これつきりですよ。いますよ。気になる女性」

「そ、それは誰ですか？」

「そこからはプライベートなので言えません」

「そ、そうですね。失礼しました」

聞き終わると、機材を片付けた。うむ、素晴らしいまでに早い。一分切ったんじゃないかね？つて、誰だ。服を引っ張るのは……………。

「その……………誰なんだ。気になる女性というのは？」

シエリルだった。まあ、そうか。普通な。

「内緒だよ」

「練習に付き合わないぞ」

顔を赤らめたら説得力無いぞ。シエリル。

しょうがねえか。俺は他の誰にもばれないようにシエリルに耳打ちした。「お前だよ。シエリル」と。正直、かなり恥ずかしかった。見れば、シエリルも真っ赤だった。

『ほ、本当だな』

おお、まさかの『個人秘匿通信』まで使ってきた。まあ、怒られるけど、こいつとならいいか。

『本当だ』

『嘘はつくなよ。絶対だぞ』

『嘘つく理由があるのか？俺に』

『・・・・・・・・・・ない』

『だろ。だから、心配すんな』

『分かった』

それを最後に通信を切った。織斑先生は・・・・・・・・・・いないな。

それから、このパーティが終わるまで、俺たちは二人で一夏の面白い姿を見ていた。

翌日

(眠そうだなー。貴魅夜の奴)

俺はクラスの自分の席に座っていた。周りの女子も会話からは貴魅夜の話題が多く聞こえる。総称するところだな。

「神阪貴魅夜を落とした女子がいる」だ。ホントかな？あ、あと、もうひとつ。「転校生がいて、それは代表候補生らしい」という噂もある。興味深いな。

「今頃、転校？それはやはり、このセシリア・オルコットの存在を危ぶんでのことでしょうね。」みたいなことを言っていたが、それも違う気がする。なんか、嫌な予感がするんだよねー。こっ、なんか、くるみたいな。

「織斑君が勝てば、皆が幸せだよー。それに専用機持ちはこのクラス以外だと四組だけだから、大丈夫だよ」

「その情報、古いよ」

「「「!?!?!」」」

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっていたのは……………

「鈴……………?お前、鈴か?」

俺のセカンド幼馴染の凰 ファン・リンイン 鈴音だった。

(一夏の知り合いか?あいつ)

俺は鈴音と名乗った女を訝しげに見ていた。すると、シエリルが話しかけてきた。良い匂いだ。ラベンダーかな?

「あの娘、中国の代表候補生だ」

「それより、良い匂いだな。シエリル」

ガツン

鈍い音がしたな。ゲンコツはないだろ？

「茶化すからだ」

読心術つか、こりやまた便利な能力だ。おっと、状況が変わったな。さすがは織斑先生。一瞬で修羅場を地獄絵………って、危ねえ。

俺の顔があつた場所を出席簿が通り過ぎた。ってか、あの速度死ぬだろ。普通に。

「チッ」

今、舌打ちしたよ。あの先生。ヤバすぎるだろ。恐れーよ。あの先生、すでに化け物レベルだよ。

「おいつ、神阪。あとで、柔道場へ来い。いいな」

「えっと、何故でしょうか？」

「いいから、来い」

「わ、分かりました」

俺は従うしかねえよ。シエリル。俺は死んだとしても、お前を愛している。

「そのセリフ。ちょっと、クサすぎ………」

俺に心のプライベート及び、表現の自由はないのか？

授業が終わってすぐに……………

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

だぜ。ヤベツ、心が病みそうだ。貴魅夜は連行されたしな。千冬姉に……………。何があつたんだ？

「なんだよ。いきなり……………」

というか、学習しろよ。二人とも午前中に山田先生に注意五回、千冬姉の出席簿アタック三回（飛んで行ったはずだが、なぜか戻っていた。なんでだろう？）されていた。というか、千冬姉の前でぽーっとしてんなんて、獰猛なトラの前で焼き肉のたれ塗りたくって、『さあ、やって下さい！！』という感じの全力アピールだ。

「まあ、話は飯食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……………。お前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくってよ」

はいはい、ありがとございます。というか、誘ったのは筭とセシリアだけなのだが……………クラスメイトが数名ついてきてる。まあ、いいけどな。

俺は今日も日替わり。リーズナブルで毎日違うものが食べられる。

ありがたいことこの上ない。

ちなみに、箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ……つて、またそれかよ。もっと、色々試そうぜ。俺もか……。

「待ってたわよ、一夏!」

どーん。って何の登場だよ、お前は……。ってか、邪魔だろ。その位置は……。みんな迷惑そうにしてるじゃないか。空気読め、鈴。ドガツて、蹴るなよ鈴。

「アンタ、失礼なこと考えていたんでしょ」

「ちげえよ。鈴のいる場所が皆からすれば邪魔だから。どかねえの。かなって思っただけだよ」

「う、うるさいわね。わかってるわよ」

「のびるぞ」

俺は鈴が持っているお盆に乗ってるラーメンを見て、言った。

「わ、わかってるわよ!大体、アンタを待ってたんでしょ!うが!なんで早く来ないのよ!」

それが分かるなら、俺はエスパーとしてとくに生計立ててるわ。まあ、そんなことはいいや。とりあえず、不機嫌そうなおばちゃんに食券渡さないと。

その後は、大変だった。鈴への質問は全部却下っていうか、スルー

され、俺ばかり答えさせられたり。箒とセシリアからは非難の目で見られたり、ISの特訓をしてやるとかで大変だった。

「え？」

放課後、第三アリーナ、そこに一夏のアホな声が聞こえる。まあ、実際、俺も驚いた。篠ノ之が『打鉄』を装着していたからな。

んっ？昼に何してたって？織斑先生による俺のための地獄絵図を見せて貰ったんだよ。というか、組み手であそこまで強いって、IS持ったら、本当に地獄にされかねないな。この街は………。

「訓練機の使用がこんなにあっさり降りるなんて………予定外ですわ」

一夏は不思議そうな顔をしているな。というか、鈍感過ぎんだろ………まあ、こいつらしだいかな？そう思い、篠ノ之、セシリアを見る。

「では、訓練を始めるぞ。一夏」

「お、お待ちなさい。一夏さんの相手は私ですわ！」

「ええい。邪魔するなら斬る」

いや、二人で戦闘始めんなよ。見るよ。一夏が唾然としてんじゃねえか。しょうがねえな。

「一夏。一手、やるつか？」

「おお、いいぜ」

「やらせん（ません！）」

気迫に満ちた表情で俺に……っで、俺？

「待て。一夏の特訓はどうすんだ？」

「お前を倒してからだ！」

「そうですわ！」

息ピッタリだな。おいつ！

「やるぞ……！一夏……！」

「お、おお」

そうして、俺&一夏対篠ノ之&セシリアの試合が始まった。

「『黒天』……リミッター解除……！『絶極零夜』発動……！穿て……！『穿つ深淵の雨』」

俺は最初から、『黒天』を引き絞り、放つ。

それをセシリアと篠ノ之は左右に分かれて避けた。と、思ったか？

「『黒夜 極型』、リミッター解除！『断ち切る（ブレイク・オブ）

闇の（ダークネス・）刃^{ブレード}」

そう言うと、黑夜の周りを黒い霧が纏い、雪片式型の様なエネルギーブレードが出現し、篠ノ之に斬りかかる。

「何だこれは？」

「答えている暇はねえんだ。これで終わらせる」

「させませんわ」

「こっちのセリフだ！セシリア！」

ライフルで俺を狙い、撃とうとしてたのを一夏が雪片で斬りかかり、妨害する。

「ナイスだ」

「どうも」

こっちも終わらすか。

「悪いな。篠ノ之。一夏じゃなくて」

「なっ、貴様、何を言って……………」

「悪い。隙だらけだ」

そう言い放つと、俺は篠ノ之の刀を弾き、斬った。そうすることで、エネルギーが回復する。便利だぜ『絶極零夜』。

「一夏!どけっ!」

俺はそう指示し、篠ノ之とセシリアだけになった射線に『穿つ深淵の雨』を放つ。

簡潔に言おう。俺たちの勝ちだ。

「ふうー。助かったぜ。貴魅夜」

「どういたしまして。それより、白式って、燃費悪くねえか?」

「そうなんだよな。武器も雪片だけだし……シールド無効化攻撃はいいんだけど、こっちも減らされるしなー」

「でも、織斑先生はそれで勝ったんだろ?」

「そうなんだよなー。俺も頑張らないとな」

「そうだな」

そう言うと、貴魅夜は黒式のコンソールを開いて、チェックを始めた。

「うーん。やっぱ、『断ち切る闇の刃』に使われるエネルギーは八ンパないな。考えて使わないと」

「そういえば、貴魅夜の武器って、リミッターがついてんのか?」

「そうみたいだな。あまりに強すぎるから、つけてんだって。とい
うか、雪片みたいなものだ。まあ、こいつの場合はシールドエネル
ギーと各種エネルギーが一気に無くなるからな。さっきもシールド
エネルギーが47しかなかったんだ。助かったぜ」

「そ、そんなに一気に無くなるのか？」

「そうだけ」

「す、すごいな。よくそんなの扱えるな」

「いや、使おうとしたら、シエリルに負けたよ」

少し、苦笑気味に言っていた。もしかして、

「もしかして、貴魅夜の彼女ってシエリルなのか？」

「そうだが。それがどうした？」

平然としていられるなんてすごい精神だな。ある意味感服するぞ。

「お前ほどではねえよ」

「なにがだ？」

「気にすんな。んじゃ、俺は先に行くぞ」

そう言っつて、出て行ってしまった。んっ、誰か来たのか。まあ、恐
らく鈴だろっつが……。

「おつかれ。はい、タオル。飲み物はスポーツドリンクでいいよね」
「サンキュー。あー、生き返る……」

うん、汗まみれだと気持ち悪いしな。それよりもこのスポドリ。これは最高だ。ぬるい温度は運動後の身体には最も、いいんだ。冷たいものなんて、言語道断だ。確かに、あの爽快感は良い。だが、一時の爽快感のために身体にダメージは良くない。皆も駄目だぞ。ぬるいものにするんだ。

「変わってないね、一夏。若いくせに体のことばかり気にしている」とい

「あのなあ、若いうちから不摂生してたらいかんのだぞ。クセになるからな。あとで泣くのは自分と自分の家族だ」

「ジジくさいよ」

「う、うっせーな……」

なんか、にやにやしている鈴に見透かされるような視線に落ち着かない。それは……俺のことをわかってるような眼差しは、妙に落ち着かなくなってしまう。

(こいつ、こんなに可愛かったけ……?)

最後に見たのが、確か、中二の冬。それから一年ちよいしか経ってないのに、なんだかんだやかましかった頃にはない『女の子らしさ』がそれとなく態度から感じ取れる。さんざん女友達としてしか見て

つてか、箒かよ！というか、このタイミングで言うことじゃねえだろ！

「一夏、いまのどういふこと？」

「えっと、俺、転入したきたじゃん。一人部屋作れなくて、それで箒と過ごすことになったんだ」

「それって、同じ屋根の下で寝食を共にするってこと！？」

「ああ、そうなる。でも、箒で良かったよ。知らない女子じゃ緊張して寝不足になっちまうよ」

「幼馴染だったらいいわけね」

「はっ？」

「何でもないわよ」

「そ、そうか」

俺はこの時、鈴を止めればよかったんだ。そうすればあんなことには……………。

「という事で、部屋換えよ。篠ノ之さん」

「私が変わる理由はない！」

というやりとりが始まりだった。

にしても、しまったな。説明しなきゃよかったぜ。こうなるんだっ
たら……………。

「一夏、約束覚えてる？」

「約束？ちよつと、待て、思い出す」

えつと……………おおあれのことか。

「あれか。料理の腕が上がったら……………」

「そ、そつづ。それ。」

「おごつてくれるってやつか？」

すごいぞ。俺。小学校の時の約束のはずだ。確か……………それ
覚えてるって、俺の記憶力はすごいな。ねぎらわなければ。

「……………はい？」

んっ？鈴が呆然としてるぞ。ちゃんと覚えてるじゃないか。

「あれだろ。鈴が料理できるようになったら、俺に飯をこちそつし
てくれるって約束だろ？」

なにしろタダだ。こんなにいいことはない。

「しかし、俺の記憶力はすごいな。自分でも……………」

パンツ！

「えっ？」

俺は叩かれていた。そうして、鈴の方をゆっくり向くと肩が小刻みに揺れていた。

「鈴・・・・・・・・」

「サイツテエ、女の子との約束忘れるなんて、男の風上にもおけない！犬にかまれて死ねばいいのよ！」

そして、そのまま部屋から出て行った。男の風上におけないって、結構傷つくぞ。鈴よ。

「一夏」

「んっ」

「馬に蹴られて死ね」

なぜか、箒までお怒りだ。それにしてもこの痕、消えるかな？女子の質問攻めは嫌だぞ。あれは気力がすぐに尽きてしまうからな。

しかし、どうやって謝ろう・・・・・・・・ほおっておいた方が良いかな？

その頃、『クラス代表対抗戦』のトーナメント表が貼られていた。

一回戦、一組代表 織斑一夏 対 二組代表 凰・鈴音

第三話 転校生は代表候補生で一夏のセカンド幼馴染（後書き）

けっこう、きつい。文章の量がハンパなかったので、所々省略しています。

というか、貴魅夜の順番が少ない！？どうしよう………。

よしっ、原作にはないけど、ISの襲撃事件を起こそう。

そうすれば増えるはず。っていうか、鈴とセシリアと一夏とシェリルと貴魅夜で倒せるかな？まっ、頑張るか。

最後になりますが、応援してくれる人へ。感謝を申し上げます。

読んでくれる人が一人でも増えてくれると嬉しいです。

では、また次回

第四話 決戦！一夏対鈴（前書き）

連日更新です。きりを早く良くして、オリジナルストーリーを考え
なきゃ……。それと早く、シャルとラウラを出したいし……
……。

では、第四話の開幕です。

第四話 決戦！一夏対鈴

俺は最近、鈴に避けられている。

もちろん、クラスに来てもない。それどころか、廊下だろうが食堂だろうがガン無視だ。鈴よ。いくら俺でも傷つくぞ。露骨に顔を背けて、『怒ってます』雰囲気出しまくってんだぜ。いつも行動を共にする貴魅夜には苦笑されるし、どうすんだよ。この破壊力が第二次世界大戦の日本軍の兵器にあれば、アメリカにも圧勝だったんだろうな。どれくらいの威力かは知らんが。

「んで、一夏。どうすんの？えっと、鳳さんだっけ？のこと。そうとう怒ってんらしいじゃん」

「それより、クラス対抗戦リードマッチだぞ。アリーナは今日から試合用に設定されるから実質、使えるのは今日までだぞ」

「そうなんだよなー」

そうぼやきながらも、いつものメンツ……俺、貴魅夜、篝、シエリル、セシリアの五人で第三アリーナに向かう。

「まあ、大丈夫じゃないのか。ISも使いこなせてきてるし」

「当然ですわ。この私が特訓に参加しているのです。このくらいできて当然。むしろ、できない方がどうかと思いますわ」

「だが、鳳さんもいるし、そうそう勝てせてもらわないと思うんだが」

「確かにそう思う。一夏がシールド無効化攻撃を適当に使わなきゃ、そこそこはやれるだろ？まあ、問題は一夏自身ってことかな」

そう言っつて、ドアを開く。開いたまではいいんだ。そこには、鈴がいた。

「待ってたわよ……邪魔よ。アンタ」

おっと、怒られちまったな。というか、自己中すぎないか？一夏が可哀想だな。俺は肩をすくめながら、シェリルに目で同意を求める。

(どう思う？シェリル)

(同感ね。でも、一夏も悪いわよ。女の子との約束を破ったんだもん)

(そうだな。自業自得かな)

アイコンタクトをしているうちに、喧嘩に発展していた。でも、さっきのはすごくないか？アイコンタクトできたら、秘密が保持できるぞ。画期的だな。好きな人の前で堂々と思いを伝えられるからな。

俺の志向を読んでいたのかシェリルの頬が赤くなる。ヤベエ、普通に可愛い。というか、可愛すぎるぞ。マジで俺と二人っきりの時にしてくれ、その顔。ああー、写真欲しかったな。

「ひるたに、貧乳」

一夏がそう言った途端にISを右肩まで展開する。そして、展開と同時に壁に穴が開く。なんでだ？

俺とシエリルも気持ちを切り替えて、鳳のISを注視する。だが、動いた気配が無い。どうやって、壁に穴を開けたんだ……鳳は？

というか、怒らせること言うなよ……一夏。とりあえず……。

「とりあえず特訓、しようぜ」

『クラス代表対抗戦^{リード・ド・レズ・チ}』の一回戦は一夏対鈴だった。さてどうなるのかね？

(えっと、鈴のIS名は……『^{シエンロン}甲龍』って、ドラゴ○・ボールかよ……ええい、紛らわしいからそのまま読んで、『^{リウリュウ}甲龍』でいいや)

それはセシリアと同じで非固定浮遊部位^{アンロック・ユニット}が特徴的だな。それに棘付^{スパイク}き(・)装甲^{アーマー}は痛そうだな。あれで殴られたくはない。

「一夏、今謝るなら少しだけ手加減してあげるわよ」

「スズメの涙程度だろ？というか、そんなもんはいらない。全力で来い。鈴」

俺はセシリアの時もそうだったように手加減されるのは嫌いだ。(前、貴魅夜がワン・オフ・アビリティーを使わなかったときは、目的があつての行動だからセーフ)だから、俺も手を抜かない。だって、勝負つてのはそんなもんのはずだ。全力でやって初めて意味がある。だから、

「いくぞ鈴!」

俺は貴魅夜に言われたとおり、突っ込んでいった。もちろん全力だ。

「何を教えたの?」

「恐らくだが、圧縮された空気を打ち出して撃ってるんだと思うんだ。あの機体は」

「それが?」

「まあ、ちょっと待ってって、アイツのは砲弾が見えないどころか、砲身も見えないんだ。だから、一夏に教えたのは、“準備される前に、先制を与えること”だったんだが……見事に避けられやがった」

俺は頭を抱え、一夏を見ている。それを少し笑っていたシエリルが見つめていたが試合に目を戻す。そこでは、ちょうど、一夏と鈴が話しているところだった。

「よくかわすじゃない。この『衝撃砲《龍砲》』は砲弾は見えない。それどころか、砲身も見えないのよ」

「そうみたいだな。貴魅夜のおかげで分かったんだけどな。それは」

「貴魅夜って？あぁ、あの男ね。一発で見抜くなんてすごいじゃない。だから、すぐに特攻に来たのね。先制を与えるって言われて」

さすがはセカンド幼馴染……だけど、お前の知らないことの一つだってあるんだぜ？それで、一泡吹かせてやる。

俺は千冬姉との会話を思い出していた。

『バリアー無効化攻撃？』

『《雪片》の能力だ。砕いて言えば、相手のシールドを無視してその本体に直接ダメージを与えるという技だな』

『つまり……？』

『ハアー。絶対防御が働いて、相手に必然的ダメージを与える技。というところだ。理解したか？』

『なんとなく……』

『まあいい。お前は私と同じで一つのことを極めた方が強くなる。私の”弟”だからな』

そうだ。俺は世界最強の弟なんだ。負けられるか。

「鈴」

「なによ」

「本気でいくぞ」

鈴は顔を真っ赤にして、視線をそらしてしまった。まあいいか。やり
りますか『イグニッション・ブースト瞬時加速』を。

「一夏の雰囲気が変わった」

「そうみたいだね。なんか、気迫に満ちてる」

一夏は風の衝撃砲が発射される前に距離を詰めようと加速体型に入
っていた。なんなのだろうか？

「まさか、『瞬時加速』？」

「なんだそれ？」

「多分、みれば分かる……」

言われたとおりに見てみると、一夏のトップスピードが急速に上が
り、風に突っ込んでいった。だけど、そこで試合は妨害を受けた……

ドガアアアアアア

「なんだ!？」

天井のバリアを突き破り、何か（・・・）が入ってきた。

『一夏、試合は中止よ!すぐにピットに戻って!』

『いや、無理だ!ここで抑えた方が良い』

『貴魅夜!それに、シェリルも!』

『質問は後だ!来るぞ!』

貴魅夜の言葉通りにISが危険信号を発した。

未確認のISが乱入。こちらをロックしました。それも、二機も・・・

『一機ずつ。分けて倒そう。そうした方が良い』

「それぞれ、お互いから離れた場所でやりましょう」

『分かったわ』

『じゃあ、俺と鈴、貴魅夜とシェリルでいいな』

『ああ』

『OK』

『分かってるわよ』

『それじゃあ、いくか!』

一機の未確認ISにシエリルが攻撃し、もう一体から引きはがす。そうすると、横から凰が衝撃砲を撃って、もう一体を引きつけてくれた。

「どつやるっ?」

「さあ……出方次第だが……俺が前衛、シエリルは後衛だ。それを基本にしよう」

「OK」

「じゃ、いくぞ」

俺はそのISに黑夜を携え、斬りこむ。そこにそのISはビームを放つ。それを黑夜で斬り裂こうとするも、逆に弾かれる。

「威力だけなら、セシリアより上、だな……性質が悪い」

「気をそらすように攻撃して、私が攻撃するから」

「わかった。頼んだぞ」

俺は再度斬りこむ。だが、今度は簡単に避けられる速度でだ。それ

に対し、ビーム兵器のみなのか撃ってきた。今度は避ける。そして、そのISにシエリルの銃弾が当たる……だが、反応は無い。

「なんなんだこいつ……」

「わからない……でも、普通じゃない」

そいつはこちらの存在を再認識するかのごとくこちらを向き、右手を向けてくる。ビームだ。

俺たちは避けるも、アイツは制限が無いのか？と思ってしまつほど撃ってくる。これじゃあ、『絶極零夜』を発動させる余裕もない。しかし、なんか引つかかるな。あいつ、無機質すぎる……。人が乗ってんなら、声の一つぐらい聞こえてもいいはずだが……。

「貴魅夜！私が一瞬でも前衛やるから、その一瞬で『深淵の雨』を撃てる？」

「だが……」

「それしかないの！」

「わかった……無茶は、すんなよ」

「うん。頼むね。貴魅夜」

シエリルが近接武器の『シュレント・ダガー』を装備し、突っ込んでいった。それに対し、そいつはエネルギーを充填させていた。だが、それは俺も同じだ。今までと一つ違うのは、弓の先端が更に折

り曲がり、一極点型で放とうとしたことだ。

「くらえ！『アビス深淵の（・）流星』！」

そいつと同時にエネルギーがたまった。俺は弦を解き、放たれた矢に命じる。「あのISを壊せ」と、それが通じたかどうかは分からないが、ビームを打ち消し、エネルギーが充填していた右腕を壊し・・・正確に言うと、右腕から左肩まで貫通し、それは爆ぜた。

「織斑たちはやってくれてるようだな」

「そ、そうですね」

さっきまで摩耶は「避難して下さい」と、言ってたが、今は残して良かったと、思っていた。そうでなければ、生徒の救助に全力を尽くせないからである。

「なに、二機とも一夏たちが倒すさ。コーヒーでも飲むか」

そういって、千冬は塩の入った容器に匙を入れ、コーヒーに入れた。

「あのっ、それ、塩ですけど・・・」

「！？似たようなのをおくな！」

「でも、思いつきり、塩ってありますよ・・・」

「・・・飲んでいいぞ。山田先生」

「えっ!?!」

「ほら、一気にいくといいぞ」

悪魔だ悪魔がそこにいる。反射的にそう思った。

モニターでは、一夏たちが映し出されていた。

「ああ、また外した。一夏、しっかりやんなさいよ」

「わかってるって」

それにしても、なんか動きが気になる。なんでだ？

普通では、避けられない速度で攻撃はしていた。しかし、零距离でもスクラスターの力で逃げられる。貴魅夜たちは一回攻撃を当てたつばいが、ほとんど無傷だ。

「一時離脱よ!一夏」

「おお」

そいつはコマのように回り、ビームを縦横無尽に撃ってくる。一回でも当たったら、負けだな。俺は……。

「鈴、あとどれくらいある?」

「180ね。このままだと、倒せる確率は一桁台よ」

「0じゃなきゃいい」

「アンタ馬鹿？確率が高いほど良いに決まってるじゃないの。アンタ、絶対宝くじ買うでしょ？」

失礼な。こう見えて、俺はギャンブルは弱いんだぞ。だから、絶対買わない。人生、貯金が一番だ。年金なんて期待するなよ。あれはもう、都市伝説クラスの嘘っぱちだからな。

しかし、あれは人が乗っているのか？全くそう見えんが……。

「……なあ、アイツさあ。何かに似てない？」

「コマとか……言わないわよね」

「見たまんまじゃん。なんていうか。ロボットっぽいつていうか……。」

「ISは機械よ。そんなことは分かってる。あれって、人が乗ってるのかな？つてこと」

「無人機つてこと？ううん、ありえない。ISは人が乗らないと動かない……そういう風に作られているから。無人はありえない」

「もし、無人機だしたら？」

「無人だったら、勝てるの？どっからそんな自信が出てくるのよ」

「ああ、人が乗って無いなら、全力でやれる」

一夏の言う全力……それは、ワン・オフ・アビリイティの『零絡白夜』のことを指すのだった。そもそも、『雪片式型』は『零絡白夜』まで含めて、『雪片』なのだ。だが、退陣で使うには、危険すぎる。そのため、一夏は使っていないかった。本当の力を……・『零絡白夜』を……。

「わかったわ。その話、乗ってあげる。で、方法は？」

「まずは、アイツに龍砲を思い切り撃ちこんでくれ」

「いいけど、当たらないわよ」

「いいんだ。それで……」

「わかった。絶対成功させなさいよ」

「おお」

それぞれが、準備に入ったところで……第の音が聞こえた。

(なにやってんだ！アイツは)

その声はそれを倒した俺たちにも聞こえてきた。

「マズイ！やられるぞ！」

俺は無理矢理、『瞬時加速』を試そうと思ったが、止めた。

なぜなら、一夏がそいつの前に立ち、鈴の龍砲を受け、突っ込んでいったからだ。

（白式が光ってる？）少なくとも、俺にはそう見えた。そして、そのまま、それを、切り裂いた。だが、

「まだまだ！一夏！」

一夏はそれに殴られ、しかも、ビームをくらう範囲にいる。しかも、こっからじゃ、間に合わない。『黒天』以外は……。

「届け！」

俺が放ったのとは別にビームがそれを貫いた。セシリアだ。

俺も、一夏も皆がホツとしてしまった。だが、それは、また動きだした。一夏は熱線へと姿を消した。

「良かったな。生きてて」

「ああ、本当だぜ。よく生きてたな。俺」

一夏は普通に生活してた。あの機体は全て破壊を確認した。だから、もう出てくることは無いはずだ。

「まあ、次は学年別個人トーナメントだな。お互い、ベストを尽くそうぜ」

「もちろん。本気で来いよ」

俺たちは拳を重ね、今日は解散した。

ついでに言っておこう。一夏は部屋を変えられたらしいが、俺は変えられなかった。バレてんのかな？先生たちに。

第四話 決戦！一夏対鈴（後書き）

かなりオリジナルにしてしまいました。さすがにきつかった！。さて、次はやっと、シャルルとラウラですね。正直、書くのが楽しみです。

でも、二機の設定はやりすぎたかな？ま、まあ、内容があんま、原作壊してなきや、大丈夫ですよね？
では、また次回

第五話 IS実習 襲撃 貴魅夜の過去（前書き）

これはオリジナルのストーリーです。

原作二巻：第一話の代わりです。

それでは、スタート！

第五話 IS実習 襲撃 貴魅夜の過去

今日はIS学園の公開実習の日だ。無論、外部からの立ち入りは厳重に監視、審査され、ようやく入ることのできるものだ。

俺と一夏はお偉いさんと面識が無いため。それぞれ昔の友達を招待することにした。一夏は五反田ごたんだ弾だんという青年を。俺は相馬そうま簾れんという青年をそれぞれ招くことにした。

「前日」

「もしもし、簾か？」

「俺の携帯に俺以外が出るのか？貴魅夜」

「前にお前の妹が出たぞ」

「あいつ、馬鹿」

「まあいいや。お前さあ、IS学園に興味ある？」

「あるぜ。あそこは夢の国って言われるぐらいだからな。俺たち男からすれば」

「招待券あるぞ」

「ください！！！」

「分かってるって、今、データ送る」

「おお、貴魅夜様。恩に着る」

「そうかよ。IS学園の校門のところにいるから、待ってるよ」

「了解です。隊長」

「おお、じゃあな」

「ちょっと待て、お前、彼女できたのか？」

「何でだ？」

「俺の魅力で落としちまいそうだからな」

「大丈夫だ。落ちないから」

「“落ちないから”ってことはいるのか」

「そうだけど。それが」

「昔のお前じゃ、考えらんねえな、って思ってな」

「そうだな。俺は救われたのかもしれないな」

「まあ、楽しみにしてるぜ」

「おお、俺の力を見せてやるぜ」

「楽しみにしてるぜ。じゃあな」

「じゃあな」

俺は久振りに聞いた親友に声に正直、救われた。あの頃、護れなかつた物を今度は護る。俺は『黒式』を見ながら、そう誓った。

ほどなく、その日を迎えた。かなりの著名人ばかりだな。大丈夫かアイツ？

「大丈夫かな。弾の奴」

隣で同じく親友を待っていた一夏もつぶやく。俺と同じ思考回路に笑いが漏れかけたが、必死にこらえる。

「ねえ、あの人たち誰だろ？」

「男じゃん。誰かの彼氏かな？」

「私、赤毛の人いいと思う」

「わたしは茶髪の人かな」

俺と一夏はこの時点で答えを導いていた。『あいつだな』と……

「おおーい。一夏。どこだー」

「たあつく、貴魅夜の奴どこだよ……」

二人はなんかつるんでいた。遠目からだ不良だな。

「一夏……ってことは織斑君の友達!」

「貴魅夜くんの友達もいる!」

面倒なことになる前に二人を救出するか。俺と一夏はだれよりも早く着き、強引に連れて行った。

「なんだよ。いきなり……」

肩を上下させながら、連は聞いてくる。その隣で弾も一夏に聞いていた。

「めんどくさいからな。あついうのは」

「面倒?なら、変われ!お前の彼女を俺のにする!」

「させるか。馬鹿!」

俺は胸倉に跳びかかって来た簾の手を掴み、逆ひしぎにする。

「痛い、痛い。ゴメ、キブ」

「分かったよ。しゃーねえな」

プシュー、とドアが開く。

「貴魅夜。セシリアたちが探してたよ」

「悪いなシエリル。一夏いこーぜ」

「おお」

何か言いたそうな簾に「口をつぐめば、良い人紹介してやるぞ」と言い、口封じする。

「一夏さん。遅いですわよ」

「そうよ。アンタは馬鹿なの？」

「遅いぞ。この戯け」

一夏が入った途端にこれだもんな。連は凍ってるぞ。弾は……鈴と親しそうにしているな。セシリアと箒が睨んでるから一夏は会話に集中できてない。可哀想に。そんなこと思っていると、コソコソ声で話しかけてくる。

「なあ、あれ全員、一夏って奴のことを好きっぽいな」

「さすがだな。簾」

「もちだ。というか、レベル高いなー。ここ」

「そつだな」

「お前は彼女がいるから、レベル低く感じるんだろ。あの娘、良い

「じゃん」

「本当に恐れ入るよ。簾」

それだけ言うと、自らの身体を離し、シェリルの横に座る。

「どうしたの？」

「別に。ただ、ここに来て良かったなと思っている」

「そうなんだ」

「ああ」

それだけ言うと、俺たちは黙ってしまった。一夏たちのコントを面白そうに見ていた。

「それでは、新人生の専用機持ちによる。模擬戦を始めます！」

ついでに俺は鈴と対戦だ。一夏はシェリル。セシリアはシードだ

「容赦なくいくわよ」

「全力で来い。鈴」

試合開始のブザーが鳴った。それと同時に鈴は《そつてんがげつ双天牙月》を連結させ、斬りかかってくる。俺はそれを《くろやごくごう黑夜極型》で受ける。しかし、《すわてんがげつ双天牙月》はバトンのように二か所に刃があるため。一本で

さばくのはきつい。

「わすれてるの貴魅夜？私の『甲龍』はこれだけじゃないわ」

理の言うとおり、『甲龍』は《衝撃砲》を搭載している。これは不可視の砲台なので、近接でも注意しなければならない。しかし、それは同時に弱点でもある。

「忘れてなんか無いさ。むしろ、使うのを待っていた！」

俺はチャージを始めた鈴に《黑夜極型》を振りおろす。それを避けながらも鈴は無理矢理撃つ。

「当たらないぞ。そんなのじゃな！」

俺はこの前の試合で一夏が見せた『瞬時加速』を使って、鈴に突っ込み、斬り伏せた。

「くうううう」

「ダメおしだ！」

《黒天》を呼び出し、照準を合わせ、撃ち込んだ。

しかし、それはまた、第三者に遮られた。襲撃だ。

「神阪貴魅夜。貴様のIS、もらいつけよっ」

「今度は無人機じゃないのか？」

現れたのは、『打鉄』と『ラファール・リヴァイヴ』がそれぞれ三機ずつと、『Un Known』の全身装備のISが二機だった。

「やるしかないわ」

「わかってる。それにしても、どこからこんなにISを……」

「いくぞ」

チャキ、と音がしてマシンガンが用意されていた。

「撃て！」

「させない」

放たれた弾丸をシエリルの『グラスシア・レーベル』の物理シールドが防ぐ。その隙にセシリアは『ブルーティアーズ』で、一夏は『白式』で敵の『打鉄』を次々に戦闘不能にしていく。

「くっ………マッサーカー・ゼロ』を起動させる！」

その声と共に『Un Known』が『マッサーカー・ゼロ』に切り替えられ、動き始めた。その動きは不自然にだが、どこか余裕がある様に立ち上がる。無人機だ。

「シエリル！『ラファール・リヴァイヴ』は俺が機能停止にさせる！お前らはあれを頼む！すぐに終わらせて援護するから！」

「……わかった」「」

「いくぞ！」

俺はラファールの群れに突っ込んではいかなかった。一撃で終わらせる。そのために『黒天』のエネルギーを完全値まで上げ、『深淵の雨』を放つ。恐らく、初見のためか。一機も避けられずに戦闘不能に追い込んだ。

『マツサーカー・ゼロ』に突っ込んだ一夏たちは二組に分かれていた。一夏とシェリル、鈴とセシリアという二組に。

だが、『マツサーカー・ゼロ』の機動力は前回乱入してきたISよりは遅かったが、攻撃は避けられていた。しかも、ビームではなく実弾仕様だ。おかげで『絶極零夜』で楽に回復できない。

「くらえ！」

一夏が斬ろうとしたが、無理な体勢で避け、反撃してくる。俺は『黒夜極式』を展開し、反撃しようとしている『マツサーカー・ゼロ』に斬りかかった。しかし、こちらを向き、銃弾を当ててくる。そこはコンビネーションか、シェリルが射撃、一夏が切り裂いて、『マツサーカー・ゼロ』の右腕が壊れた。

「まだだ！」

それでもしつこく俺たちを撃ってくる。でも、もう終わりだ。一夏

は真後ろからの『瞬時加速』。俺は真正面からの『瞬時加速』、シ
エリルは『グラスシア・レベル』に付いている。第三世紀型兵器
の『リボルバー・ジエミニ』を使い、それぞれが攻撃を繰り出した。
それに対し、『マッサーカー・ゼロ』は俺に向かい、ミサイルを撃
つてきた。それは俺を墜落させた。だが、『マッサーカー・ゼロ』
も一夏の攻撃で沈んだ。

俺はそれを見届けるとISアーマーが消え、そのまま地面に落ちた。
.....

(ここは?)

『ここはね、貴方が好きな場所』

(アンタは誰だ?)

『私?私は私。それ以外の何でもない』

(それもそうか.....。俺は何でここにいるんだ?)

『ねてるから。記憶を思い出してみて、ここは*****で、よ
く君は*****に連れてきてもらったんだよ』

(わるい、少し、聞き取れなかった。もう一回頼む)

『最後だよ。ここは*****。そして、君の.....
』

そこで声が途切れ、俺は再び、闇に落ちて行つた。

「貴魅夜！起きて。貴魅夜！」

「ううっ……ここは？俺は……生きてるのか？」

「貴魅夜！！！」

「うおお」

俺は起き上がった。それはいい。でも、シエリルに抱きつかれ、ベッドに押し倒される。というか、なんかマズイ気がする……
……。ここは学校、学校には先生が……。先生といえば、織斑先生……。 “死” 確定！！！！

「シエリル。苦しいから、離れてくれ……」

「いやだ！反省するまではこのままだ！」

反省つて、ああ、あのことが。俺は『マッサーカー・ゼロ』に真正面からぶつかっていったのを思い出していた。その後はどうなったんだろうか？一夏たちが倒してくれたんだろうか？っていうか、そんなことより、シエリルをどうかしなくちゃな。

「ごめん。でも、正直、あれしか方法が無かったんだ」

「だめ……。どれだけ、心配したと、思ってたのよ」

俺は俺の胸の上で泣く、シエリルを見て、あの時の無力感に襲われた。あの時……姉さんが殺された日。俺が殺してしまった日。

あの日は、姉さんと兄さんと三人で浜辺に行っていた。そう、夢で見た浜辺だ。確か、姉さんはISが使えたんだ。今でいう、専用機も持っていた。それでも、姉さんは殺された。俺を庇わなければ、あの時、姉さんに、姉さんの背中に突き立てられていた剣は存在しなかった。姉さんはいまでも、生きていた。

そして、俺は姉さんの機体の名を覚えていない。名も忘れた。いや、忘れていたんだ。今なら、思い出せる。姉さんの右中指にあった黒い指輪……今の俺の機体『黒式』のことを理解できる。そして、姉さんを殺したのは……**

「貴魅夜。なに、泣いてんの？」

「えっ？」

俺は気付かぬうちに涙を流していた。それは頬を伝い、シエリルの頬に落ちる。そうか、やっとわかったんだ。シエリルに惹かれた理由が……姉さんにもすごく似てるんだ。こいつは……

なら、今度は俺が護らなくちゃ、俺が護る番なんだ。こいつに、涙なんか、もう流させない。

「シエリル。ごめんな。弱くて」

「えっ？」

「俺が弱いからお前に心配をかけたんだ。あんな無茶な戦いしかできなかつたんだ」

「……………」

「でも、それじゃあダメなんだ。みんなをお前を護り続けるには、もっと、強くなんなきゃいけないんだ。お前に、もう、涙なんか流させない。俺は……………『黒騎士』なんだから」

「『黒騎士』？」

「姉さんが言ってたんだ。これは『白騎士』のプロトタイプの騎士だつて……………。それが『黒騎士』だ。つて」

「……………」

「ようやく分かったよ。俺の『黒式』と一夏の『白式』は二つで一つだったんだ」

「つまり？」

「一夏の『白式』は『白騎士』なんだ。俺と一夏は似てんだよな。姉がいることとか、ISが使えるとか、誰かを護りたいとか。だから、選ばれたんだ。騎士に」

俺はそう言つて、シエリルの頭を撫でた。シエリルは顔を赤くするが、目はそむけない。俺に何かを求めるような視線を送り続けるだけ。

だから、俺は、唇を重ねた。その影は夕日の沈みかけた病室を妖しくいろどり、消えていった。

第五話 IS実習 襲撃 貴魅夜の過去（後書き）

やっと、過去設定が書けた。

次がシャルロットとラウラの登場です。

では、また次話で。

第六話 転校生はブロンド貴公子（前書き）

シャル&ラウラ、登場！

頑張ってくださいね。できれば夏休み中に『銀色の福音』シルバリオーン・ゴスペルまでは終わらしたい……。頑張ろう！！！うん。

では、第六話スタート

第六話 転校生はブロンド貴公子

IS襲撃から一週間・・・・・・・・・・。今、とんでもないことに俺たちのクラスは陥っていた。

その原因は・・・・・・・・・・。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルル・デュノア、三人目の男性パイロットだ。

「お、男」

誰かがそうつぶやいた。実際、俺も大層驚いている。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を・・・・・・・・・・」

見た目は中世的な顔に・・・・・・・・・・いや、どっちかといえば女の子っぽいかな？だが、礼儀正しい立ち振る舞いには一夏は見習って欲しいと思う。髪は金髪。長く伸ばしたそれを後ろ髪でまとめ、シュッと伸びた脚は同性でもかっこいいと思う。

それを統一した印象は『ブロンド貴公子』かな？まあそんな感じだ。嫌みのない笑顔が凄いな。女子は見惚れてないか？

「きゃ・・・・・・・・・・」

「はい？」

「きゃああああああああっ！」

このクラスでは、ソニックブームが起きている。俺は耳栓を装着したが、それでもまだうるさい。どういう構造をしてるんだこのクラスの子は。

「男子！三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった〜！」

うちのクラスは元気だな。しかし、某芸能人の真似してる奴いないか？それにしても、他は静かだな。先生、お疲れ様です。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

。そういえば、もう一人いたな。んっ、あいつどっかで……………。

「……………」

挨拶をする気は、無いのか？まあいいや。

「……………挨拶をしる、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを正し、異国の敬礼を織斑先生へ向ける。そこで俺はあいつの正体が分かった。アイツは……………。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ここまでで、彼女が軍人、しかも、ドイツ人ということまでは分かった。理由は千冬姉は昔、ドイツで軍隊教官として働いたことがあるからだ。で、その後は一年の空白期間を開けて、IS学園に赴任したらしい。

らしいというのは、山田先生他の教師に聞いてからである。

（俺にぐらい、何をしているかは教えてくれよな。千冬姉）

別に、寂しいとかではなく、ただ純粹に身内である俺になにも言うてくれないのは落ち着かないからである。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスが再び沈黙に包まれる。でも、なんか貴魅夜の様子がおかしいような？気のせいかな？

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

この空気をいたたまれなくなって話しかけた山田先生をラウラは一蹴した。おいつ見る。山田先生半泣きじゃないか。

そんなことを思っていたためか。ラウラと目が合う。

「！、貴様が」

んっ？こっちにつかつか歩いてくるぞ。

パシィーン

パシィーン

ラウラが一夏の頬を叩く音が教室中にこだまする。そして、痛烈な一言が響く。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

一夏はぼんやりしてたが、状況を理解していたのだろう。まあ無理もない。俺も、それこそ面識のないシェリル、セシリア、篝までもがポカーンとしているんだからな。

「いきなり何しやがる！」

「ふん………」

立ち上がって抗議するが、ラウラは来た時と同様にスタスタ戻っていく。

それに対して俺は一言つぶやいていた。

「さすがというべきか、『ドイツの冷水』、ラウラ・ボーデヴィツ
ト」

特に感情も無く、呟いていた。何故そんなことを知っているかは俺でもわからない。

時は移り、IS学園廊下。俺たち、貴魅夜、一夏、シャルルは廊下を疾走していた。それでも、周りからは

「織斑くんとデュノアくんが手を繋いでる！」

やら、

「織斑くんと神阪くんの黒髪もいいけど、デュノアくんの金髪もい
い」

や、

「者ども出会え出会えい」

どこの屋敷だよ。ここは。

俺たちは大勢の女子に囲まれる前に第二アリーナ更衣室に向かっていた。にしても、人口密度が高い。三人目だからって、騒ぐなよな。

「な、なに？何でみんな騒いでんの？」

「そりゃ、男が俺たちだけだからな」

シャルルは一夏の言った言葉に？マークを浮かべていたため。俺が補足する。

「ほら、ISは女性しか使えなかった。でも、今年から俺、一夏、シャルルお前の全部で三人のイレギュラーが出たんだ。こうなるのは仕方ない」

「あ、あつ、そ、そうだね」

「貴魅夜の説明を簡略化すると、ウ パルーパーみたいなもんだ」

「なにそれ？」

俺とシャルルは声をそろえて一夏に聞く。一夏は例えが悪かったかな？と反省するようにするが、その答えは安直だった。

「二〇世紀に日本で流行った珍獣のことだ」

「まあ、んなことよりここをさっさと抜けよう。今日は織斑先生だ

る。朝からあれを一発くらうなんて御免だぜ」

「そ、そうだな。にしても、もう一人男が来てくれてよかったぜ。二人だけだと、いろいろ面倒だったしな」

「そうかな」

「まあ、人それぞれだぜ。さて、強行しますか」

俺のその言葉にうなずき、走る速度を上げる。二人はなんか喋ってたが、この際無視だ。

爽快な圧縮音になり、ドアが開く。なんとか、第二アリーナ到着してところだな。

「あっ、時間ヤバいな。すぐに着替えちまおうぜ」

「そうだな」

俺と貴魅夜が制服を脱ぎ、Ｔシャツを投げると同時に、シャルルが小さい悲鳴を上げた。

「わあっ」

「どうしたんだ？何か忘れたか？シャルル」

「って、なんで着替えてないんだお前。早く着替えないと遅れるぞ。俺たちの担任はそりゃ、時間につるさいんだぞ」

「う、うんっ、着替えるよ。でも、あっち向いてて！貴魅夜も！」

「????いや、別に着替えをじろじろ見る性格じゃないんだが・・・
・・・って、なんで、シャルルは見てるんだ？」

「み、見てない！別に見てないよ」

両手をバタバタ振るって否定する。なんで、こんなにアクションなんだ？

「一夏、シャルル。先に行ってるな」

「あっ、おい、ズルイぞ」

手を振りながら、貴魅夜は先に行ってしまう。

「まあ、本当に急げよ。初日からいきなり遅刻はシャレにならないぞ
というか、うちの担任はシャレにしてくれない」

しかし、俺の姉兼鬼担任の千冬姉（紅蓮の炎を背中に背負ったve
r）に必要なのはシャレを聞く心の余裕だと、俺は思う。でも、そ
んな千冬姉は無いが。

それよりも視線を感じる。

「シャルル？」

「な、なにかな？」

シャルルは俺の方にちよつこと向けていた顔をそらし、ISスーツのジッパーを上げていた。

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあるのか？」

「い、いや、別に・・・つて、一夏はまだ着てないの？」

確かに、シャルルの言う通り、俺はまだ、ISスーツの腰までしかはいていなかった。

「これさ、着るとき裸つてのがなんか着づらいんだよな。引つかか
つて」

「ひ、引つかかって？」

「おっ」

んっ、シャルルはなんか顔を真っ赤にしてるな？どうしてだ。

「よっ、と。行こうぜ」

俺はようやくISを着て、シャルルと共に他愛のない話をしながら第二グラウンドを目指した。

「遅い！神阪は間に合っているぞ」

一夏たちは遅れてきていた。あいつらは馬鹿なのか？それとも、一夏がシャルルをいじめるため？つて、それはねえか。あつ、叩かれ

た。よかった、先に行つてて。

「貴魅夜」

「んっ、どうした？」

「ボーデヴィツヒさんって何者なの？」

「ああ、恐らく軍人だろうな。それもドイツだ」

「そうなんだ」

「もしかして、嫉妬か？」

「ち、違う。何を言っているんだ！」

「ちょ、しいー。今は織斑先生の授業だぞ」

「い、いめん」

シエリルの謝罪を聞いてほっとした俺は、改めて織斑先生を探す。よしっ、鬼探知機には入ってないな。なら、OKだ。

すると、後ろの方で……一夏がいる辺りで出席簿が火を噴いた。ってか、頑丈過ぎんだろ出席簿。なにあれ、実はISの専用武器だったり。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「今日は戦闘を実践してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの

十代女子もいることだしな。凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで!?!」

「専用機持ちは早く始められるからだ。早くしろ」

「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「お前ら少しはやる気を出せ。アイツにいいところを見せられるぞ」

へえ、織斑先生は一夏と違って色恋沙汰が分かるんだな。一夏のはもう中毒だけだな。にしても、鈴とセシリアの盛り上がりっぷりはすごいな。軽く引くぞ。

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は」

「あああーっ!ど、どいてください〜」

この声はまさか!

ドカーン

「ふう……」。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし
「いったい何事」

むじゅ。

「うっ？」

なんだろう、この手のひらに感じる感触は。地面ってこんな柔らかかったけ？ここだけプリンとか？そうか、プリン持ってそういうことだったんだ！

「あ、あのう、織斑くん……………ひゃんっ！」

「一夏……………とりあえず、警察に行こうか？」

えっ？プリンが喋っただけで驚きなのに。さらに警察？どうなってるんだ？

俺はいつの間にか近くに来ていた貴魅夜を見るが、なんか、汚いものを見る目で笑いながら、地面を指さす。そこにいたのは……………

「そ、その、ですね困ります……………こんな場所で……………いえ！場所だけじゃなくてですね！私と織斑君は仮にも教師と生徒ですわね！……………ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それは魅力的な」

山田先生だった。というか、山田先生はプリンだ。プリンはプリンでも、むちプリンだ！って、おっさんか俺は！

し、しかし、いかん。いつものダボダボ服からは分かりにくいが、ISスーツを着て、胸元が強調されている山田先生は正直、千冬姉より巨乳だ。俺はそれをわしづかみにしている。いや、悪いことだ

とは思っている！手をどかさなければとも思っている！だが、だが、手が動かない……そう、金縛りのごとく動かないのだ。

でも、そういうのは長くは続かない。命の危機が迫ってくるからだ。

「ハッ」

俺はある殺気を感じ、山田先生から手を離し、上体を起こす。俺の頭があつた場所をビームが通り過ぎていく。こんなことをする奴はただ一人しかいない……セシリアだ。

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ……」

うん、顔は笑ってるけど、心は鬼だ。というか、修羅だ。このままじゃ、確実に、殺される。

ガシーン。何かがつながる音が聞こえるな……ああ、確かあれだ。鈴の《双天牙月》が合体した音だ。あれは、元は二本でつなげると投擲も可能になるんだよな。そう、今、鈴がしているように。って、ええ〜。

「うおおおっ!?!」

ためらいなく首を狙ってきやがった!

俺は間一髪のけぞって避けることができた。というか、俺の味方は？ 貴魅夜、シャルル？ っつて、非難してる。貴魅夜に至っては合掌までしてる。死ぬのか？ 俺は死ぬのか!?

その答えを教えるように《双天牙月》が俺めがけて戻ってくる。あれはブルーメランみたいに戻ってくるんだ！勢い余って倒れた俺じゃ避けきれない。

「はっ」

ドンツドンツ

短い銃声が聞こえた。放たれた弾丸は的確に《双天牙月》の両端を叩き、その軌道を変える。

俺は命の恩人の射手に目を向ける。それは山田先生だった。

両手で、しっかりと《レッドバレット》を持って、撃ってくれたのだ。

しかも、いつものバタバタした雰囲気は影をひそめ、落ち着いた雰囲気醸し出していた。

「こつ見えて山田先生は元日本代表候補だからな。今くらいの射撃は造作もない」

その言葉にいつもの調子に戻った山田先生を見ながら立ち上がった。俺は生きているんだ。

「良かったな。一夏」

「ああ………って、なんで助けてくれなかったんだよ！」

「なんでって………ほら、あの二人はこれから模擬戦をやるし、無駄にシールドエネルギーを減らしたくは無かったからな」

貴魅夜は弁解し、俺の首を、空中に上げる。最初は文句を言おうと思っただが止めた。そこでは、山田先生と鈴&セシリアのコンビが戦っていたからだ。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、梁田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

シャルルは空中の戦闘を見ながらもしつかりとした声で説明を始めた。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代最高期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付け武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で正式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

俺は織斑先生の言葉を聞いて、避難した。俺がいた位置は落下点だからな。

ドーンッ

IS二機……セシリアと鈴が落ちてくるのを俺はギリギリから見ていた。

しかし、落ちてきた二人は口げんか始めたもんだから。俺は苦笑しかできなかった。

「おいつ、神阪。戦ってみるか？」

おっと。宣戦布告かな？男たるもの逃げるわけにはいかないな。なので、この勝負、

「いいですよ。さあ、やりましょうか山田先生」

「誰が一对一といった。お前とハミネスだ」

「私もですか？」

「そうだ。他の者は八人のグループに分かれる。リーダーは専用機持ちだ。いいな」

しかし、いや当然のごとく、女子は一夏とシャルルを囲んでいたけどな……んっ？俺斑先生の一言もとい、鶴の一声ですぐに女子はそれぞれについたな。というか、割り切れないからこの勝負を挑んできたわけか。ずるいな。まあ本気の教員とやれる数少ないチャンスだ。楽しませてもらうぜ。

「いくぞー！」

「いきます」

「いいですよ」

俺は近接武器の《黑夜極型》を呼び出し、斬り込む。しかし、山田先生はかわして射撃体勢に入る。でも、それを途中で中断し、シエリルが撃ち込んだからだ。それを逃すまい。と、斬り込むが物理シールドに阻まれる。前に来た襲撃車より手強いね。こりゃ。だって、俺らの戦いは何度かモニターされているわけだからな。それは当然だ。

「さすが……いや、むしろ当然ですかね。山田先生」

「い、いえ、そんなことないですよ」

「ずるがしこいね。貴魅夜」

あきれ顔で山田先生の後ろを取っていたシエリルが山田先生に撃ちこんでいた。しかし、山田先生は何とか避けた。すごいな山田先生（覚醒ver）は、俺たちの攻撃は読めますってか、これはきつ過ぎるな。

「さて、どうしようか」

「そうだね。逆パターンやってみる？」

「それは考えたけど、効果は恐らく薄い。でも」

「でも？」

「それをランダムで行えばどうだ？」

俺はかなり口角が上がっていただろう。しかし、気にしている暇は無い。今、俺は弾丸の雨を避けているからな。それにしてもなかなか弾切れおこさねえな。どうなってんだ？いや、それよりも

「いけるか？」

「やってみよう」

「合図は俺が送る。最初はシェリルが近接でいこう。それから全くのランダムだ。俺らの同時近接もあるからな。逆も然りだ」

「わかった」

「んじゃ、五秒後開始な」

ついでに言っておく、この会話全ては『個人間秘匿通信』だから盗み聞きはされてはいない。さて、そろそろ始めますか。反撃のお時間を。

上で戦っている貴魅夜たちの試合を厳しい目で見つめる織斑千冬はこの試合がもうすぐ終わることを確信していた。もちろん、負けるのは……………。

「いくぞ！」

俺は山田先生に向かつて、特攻を仕掛けていた。それに對し山田先生は向井からやってくるシエリルと俺をぶつけようと、ギリギリまで引き付けようとしていた。それは自分の寿命を短くしますよ山田先生。

「うおおおおおおお！」

《黑夜》を振り上げ、斬りかかる寸前に武器を消し、山田先生を無理な駆動で追う。これは結構くるものがあるな。俺が追ってきたのに驚いたのか山田先生は武器を俺に向ける。そこまではシナリオ通りだな。俺はここからは“狙撃手”^{スナイパー}に転向するんだけどな。武器を向けた山田先生をシエリルが後ろから斬りかかる。それを間一髪で避けるも、逆方向の俺から狙撃をくらう。其の狙撃に集中すれば、シエリルが……。こんなような臨機応変な戦いをしていくと、山田先生がバランスを崩し、俺たちは二人で斬り払った。俺たちの勝ちだ。

「負けちゃいましたね」

「いえ、二人がかりでなんとかでしたよ」

「そうです。気落ちしないでください」

「やはり勝ったか。さすがだな。恋人同士、波長が合うのか？」

「そうなんでしょうね」

織斑先生の半分ぶざけた問いに俺は結構真面目に答える。というか、

なんで知ってんの？そして、山田先生とシェリルは顔が赤いんだ？いや、シェリルは分かる俺と織斑先生がドストレートな質問と答えをしたから恥ずかしいんだ。でも、山田先生は何でだ？他人の色恋沙汰なのに、どうして顔を赤らめてんだ？分かんないから考えんやめよう。

それからしばらくはシェリルが俺に対してもものすごく怒った以外何にもない。ってか、俺だけだぜ。しかも、この行動は全員に「付き合ってます」っていつてるようなもんじゃないのか？ああ、もうわけわかんね。

昼休み、俺たちは屋上にいる。そしてメンバーは、俺、貴魅夜、シャルル、箒、セシリア、鈴、シェリルの七人だ。しかし……

「……………どういことだ」

「ん？」

なぜか箒さんの機嫌が悪い。

しかし、このIS学園はすごいな。普通の高校はアレがコレしてアレなんで、生徒立ち入り禁止なのだがそういうことは一切ない。美しく整備された花壇には季節の花々が咲き誇り、欧州を思わせる石畳が落ち着いている。そして、それぞれ円テーブルにはイスが用意されていて、晴れた日の昼休みは女子で賑わう。

恐らく、今日はシャルル目当てで学食に向かったのだろう、屋上に

は俺たち以外誰もいない。イエイ、貸し切り。貸し切り、イエイ。

「天気がいいから屋上で食べる約束だったろう？」

「そうではなくてだな……………！」

チラッと、筭が目をやった方向には俺以外の五人……………って、
貴魅夜？

「貴魅夜、なにしてんだ？」

「いや……………お前の馬鹿さ加減に呆れていたんだ。女性との
約束は裏があるんだ。それぐらいわかれよ」

貴魅夜は頭が痛そうに手を当てて、それだけ言う。

「裏？いや、でも、約束は守ってるだろう？」

「はあ。つくづく、みんなが可哀想だよ」

貴魅夜は俺に聞こえないようになんか言った。コラッ、蔭口はダメ
なんだぞ。

「陰口じゃねえよ」

まさかの読心術？こいつは何なんだろうか？

「とりあえず、俺は帰るぞ。行くつぜ、シェリル」

「ええ、そうね」

俺は貴魅夜とシェリルから冷たい視線を受けられながら、手を振った。どうして、二人とも怒っているのだろうか？俺にはさっぱりわからない。

「今のは、正しい判断でしたわね」

「ええ、そうね」

「まったくだ」

女性陣も貴魅夜の意見には賛成の様だ。俺、なんかした？

「貴魅夜は正しいね」

ぐあつ、シャルルまで味方だと！俺はどれだけいけないことをしたというのだろうか？わからない。

その後はいろいろ大変だった。ご飯を食うことにはなったが、箸に唐揚げを食べさしてあげたら、セシリア、鈴が「私も！」と、言って、俺にサンドイッチと酢豚を「はい、あくん」をやらされて、結局、俺は雛鳥のごとくに俺は三人に食べさしてもらった。評価は、箸が「うまい」、鈴も「うまい」……しかし、セシリアは絶望的に料理が下手でBLTサンドが甘かった。つまりは「激マズ」だ。しかし、欠点を直接言うわけにもいかず。俺はまだまだ苦しむこととなる。

そして、IS特訓もシャルルという力強い。本当に公私？ともに頼りになる親友を手に入れた。

でも、貴魅夜が怒った理由はいまだにわからない。ホント、なんで

だろう？

とある研究所

「さすがだな。貴魅夜の戦闘データは。だが、まだ足りんな」

男は立ち上がり、ISのコア（・・・）を取り出し、複製を始めた。

「見てろよ束。お前の作ったコアは俺が必ず男女共用にしてみせる。まあ、貴魅夜と織斑一夏のISのコアを奪うのは、こいつを完璧に複製してからだ。それで、白と黒の騎士が手に入れば、俺の復讐は官僚だ。お前が奪った俺の夢、男女平等社会のな」

男は笑っていた。しかし、その笑い声はどこか物悲しくそれでいて狂気を含んでいた。

第六話 転校生はブロンド貴公子（後書き）

や、やっと、できたー！

何回も混雑でできなかった。更新が終わった！

さて、少しネタバレしちゃいましょう。

最後に出てきた男は「福音事件」の最後で正体をばらしちゃいます。それまで予想して下さい。

こいつだろ。という答えが出た人は答えを送ってください。まあ、めちゃくちゃ簡単なんで「んなのすぐわかる」や、「なめてんの？」っていう人が恐らく、99%以上いると思いますが、これからもよろしく願います。

では、第七話でまた。

第七話 ブルー・デイズノレッド・スイッチ（前書き）

久々の投稿だ！

貴「何をやっていたんだ」

作者「えつと、他の更新を……」

貴「これを終わらせてからにしろ」

作者「すみません」

なんやかんやで第七話スタート！

第七話 ブルー・デイズノレッド・スイッチ

「で、正直一夏はどうだ？シャルル」

「ええとね、一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握できてないからかな」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

シャルルが転校してきて五日、土曜日にIS学園のアリーナを使い訓練していた。ちなみに最初のうちにやった模擬戦は俺が1勝1敗、1夏が全敗、シャルルが2勝だ。今は圧倒的に弱い一夏の講師をシャルルがやっている。

「うーん、知識として知ってるだけって感じかな。さっき僕と戦った時もほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うっ……、確かに。『瞬時加速』も読まれたしな……」

「一夏のは近接格闘オンリーだからな。より深く射撃武器を知らなきゃいけないんだよ。そうしなきゃ勝てない」

「それに一夏の『瞬時加速』って直線的だから反応できなくても貴どうぞ予測で攻撃できちゃうからね」

「直線的か……うーん」

「猪突猛進だな」

「うっせい」

「あ、でも無理な軌道変化は止めた方がいいよ。空気抵抗とかで最悪骨折だからね」

「なるほど」

うん、シャルルと貴魅夜の二人と特訓するとどんどんわかっていく様な感じがするな。シャルルが丁寧に説明して、貴魅夜が噛み砕いて言ってくれて、時折疲れないように冗談を混ぜて……とてもわかりやすい。

しかし、俺の専属コーチ（自称）のありがたい言葉は以下の通りだ。

『ごう、ずばーっとやってから。がきんっ！どかんっ！という感じだ』

『なんとなくわかるでしょう？感覚よ感覚。……はあ？なんでわかんないのよバカ』

『防御の時は右半身を斜め上前方へ五度傾けて、回避の時は後方へ二十度反転ですわ』

これのおかげで色々な意味で行き詰っていた（そして息詰まっていた）俺の前に現れた救いの主ことシャルル・デュノア。その感動はとてもではないが言葉では言い表せない。男同士気を遣わなくてい

いのも最高だ。

(大体、ISスーツの露出が高すぎるんだよ……)

本番の試合ならともかく、訓練はあくまで訓練。正直、色々な所に目が行ってしまって、やりづらくてしょうがない。

ついでに貴魅夜とシエリルの関係はもうバレている(自習中の行動を見たときにわかったらしい)。だから今の女子の目標は俺とシャルルだ。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理路整然とした説明の何が不満だというのかしら」

あー……俺の専属コーチ(自称)がぶつくさ言ってるが気にしない。

しかし、俺たちのいる第三アリーナは人が多い。数少ない男子が全員ここにすることも手伝って、過密も過密。もう満席御礼って感じだ。

だから、別グループの人にぶつかったり流れ弾に当たったりと大変だ。かくいう俺も三回は人にぶつかっている。

「一夏の『白式』って後付武装イコライゼがないんだよね？」

「ああ、俺と一夏のはそれはないな」

おっと、シャルル先生と貴魅夜先生の講義だ。心して聞こう。同じ男ということなのか、今の俺はスポンジのように覚えがいいんだ。

「ああ。二人して何回か調べてもらったけど、バスレット拡張領域が空いてないらしい。だからインスタール量子変化は無理らしい」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に要領を使っているからだよ」

「俺もそう思う」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーと、なんだっけ？」

「言葉通り、唯一仕様ワンオフの特殊才能アビリティーだよ。各ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のこと」

「ついでに言うが、これは操縦者の個性パーソナリティーで決まるから一度発動したモノが他の人に出ることはほばない」

こんな説明がスラスラ出るから、この二人がいかにかに有能かが分かるな。俺も頑張らなければ。

「でも、普通は第二形態セカンドフォームから発現するんだよ。それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代のIS。オルコットさんの《ブルー・ティアーズ》と凰さんの《衝撃砲》がそうだよ」

「なるほど。それで、白式の唯一仕様って、やっぱり『零絡白夜』」

なのか？」

「そうなるな。ついでに俺のは『絶極零夜』にあたるな」

自分のシールドエネルギーを消費することでエネルギー性質のものであればそれが何であれ無効化・消滅させる白式最大の攻撃能力、それが『零絡白夜』。それに対し、貴魅夜のはエネルギー性質のものであれば触れるだけで無効化・吸収する黒式最大の防御能力であり、エネルギー供給能力、それが『絶極零夜』。

ついでにお互いのそれをぶつけると、相殺された。

「それにしても、白式も黒式も第一形態なのにアビリティィがあるってことは異常事態だよ。前例が全くないからね。しかも、一夏に至っては織斑先生の……初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISと同じだよな？」

どうもそうらしい。千冬姉と同じなのは武器だけでなく、その仕様までが同じらしい。何とも因縁めいている。

「まあ、姉弟だからとか、そんなものじゃないのか？」

「ううん。姉弟だからってだけじゃ理由にならないと思う。さっきも言ったけど、ISと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しようとしても意図的にできるものじゃないんだよ」

「そっか。でもまあ、今は考えても仕方ないだろうし、そのことは置いておこうぜ」

第三アリーナで一夏とシャルルは射撃の練習を始めたため。俺は少し離れて、シエリルと射撃訓練をしていた。

「的を狙って撃つのか。楽そうだな」

「じゃあ、最速でやってみる？」

「いいぜ。こいよ」

俺は《黒天》をコールし、構える。俺の前には無数の的が今はただ浮いているだけだ。でも、意識を集中させた頃それは動きだした。

「……………速いな」

「『深淵の雨』はダメだよ」

「わかってる」

俺はギリギリと音がなる弦を離し、的に当てる。それを二十回ほど繰り返すと得点が出てきた。

「293点……………高いのか？」

「高いよ。銃じゃなくて弓だし、すごいと思うよ」

「そうか、サンキュ」

「じゃあ、私だね」

シエリルは《ムーンサルトHK38》を構え、最速の的を次々に撃ちぬいていった。それは見る者を魅了させる早業だった。周りはみんなぼかんとしているし、俺に至っては息をするのを忘れて見とれてしまっていた。

「えっと、387点。私の勝ちだね」

「あ、ああ。そうだな」

俺は気恥かしさから顔をそらしてしまった。そらした先にいたのは一夏とシャルルとラウラだった。

「おい」

ラウラはオープン・チャネルIS開放回線で話しかけてきた。俺としては気が進まないが無視をするわけいかないので返事をした。

「………なんだよ」

俺がとりあえずの返事をした途端降りてきた。無論言葉を続けながらだが。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様に無くても私にはある」

ああそうだろうな。ドイツとすれば一つしかない。それは第二回IS世界大会『モンド・グロツソ』のことだろう。俺としては思い出したくもない過去であり、それと同じくらい忘れられないこともある。……はつきり言おう。俺はその日、誘拐された。謎の組織に……。って、謎の組織ってテレビじゃあるまいし、ひでえネーミングだ。しかし、謎は謎なのでどうか、謎以外に表現のしようがないから上に組織なのだから『謎の組織』でいいだろう。

どういう目的かはわからんが、俺は拘束されて真っ暗な部屋に閉じ込められた。真っ暗なので時間の感覚がわからなかったが、しばらくして突然部屋が衝撃に揺れた。壁が崩れて光が差し込む中、現れたのはISを装備した千冬姉だった。俺の誘拐の知らせを受け、文字通りここまで飛んできたらしい。その姿は凛々しく、力強く、そして美しい、その姿を俺は忘れたことは無い。

もちろん、決勝戦は千冬姉の不戦敗。大会二連覇はできなかった。誰もが千冬姉の優勝を確信していただけに棄権という行為は大きな騒動を呼んだ。

その後、俺の誘拐はほとんどの人に知られることは無く事件解決に直接的な協力をしたドイツ軍に千冬姉は『借り』を返すため一年ほど教官を務め、それからちよつと行方不明になり、突然の引退。そして、今に至るといわけだ。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を　　貴様の存在を認めない」

「それは、ただのやつあたりじゃないのか？ラウラ・ボーデヴィッ

「ヒ」

「貴魅夜!?!」

貴魅夜はラウラの前に立っていた。というか、睨みあっている。いや、睨んでいるのはラウラだけで貴魅夜はいかにも涼しげな顔をしている。

「神阪貴魅夜か」

「ああ、俺のことを知っているようだ。俺はお前を覚えてないが」

「邪魔だ」

「一夏をやらせるわけにいかないんでな」

「ええい!消えろ!」

ラウラはレーザーカノンで貴魅夜を撃っていた。俺はそれに怒りを感じて突っ込んでいた。

「デメエエエエエ」

ラウラに斬りかかる瞬間、俺の手は誰かに抑えられていた。

「落ち着け、一夏」

俺はラウラを斬ろうとした一夏の腕を掴んでいた。ラウラの少し驚

いた表情に俺は軽く笑っていたが。

「『ドイツの冷水』とあるう者がこんなところでレーザーを撃つとはね。冷水より、ホットビールの方が合うんじゃないのか？」

「どうやって、避けた」

「避けた？ああ、消しただけだよ。レーザー（あんなもん）は」

俺はそれだけ言うと、一夏を無理やり引っ張り下に降りた。そして、先生のお叱りがあったためラウラは消え、俺たちもその日は解散することになった。

「はあー。貴魅夜に助けられちゃったな」

俺は更衣室で山田先生と会い、シャルルに先に風呂へ入るように言った後、白式の正式な搭乗者としての書類を書いていた。書類の量はかなりだったが実際は名前だけだったのですぐに終わり、今こうして部屋に戻っていた。

（貴魅夜はラウラのことを知っているのか？知っているにしては反応が薄かったよな）

俺はそんなことを思いつつ、自室を開けた。シャルルはそこにはおらず、シャワー音が鳴っていたためシャルルがシャワーを浴びているのを理解した。

（そっぴや、ボディークリームが切れてたんだよな。シャルルも困っ

てるだろうし、届けてやるか)

俺はボディーソープを持ち、ドアを開けた。シャワールームは洗面所兼脱衣所で分かれているためとりあえず、脱衣所から声をかけて渡せばいいか。と考えていた。

ガチャ。

?ガチャ?.....俺が入ったドアは開いていない。つまりはシャワールームのシャルルだ。そう思い、向いた先にいたのは

『女子』だった。

「あの、これ.....」

「い、い、いち.....か.....?」

「.....えっと」

俺はずっと凝視していた。濡れたウェーブのかかったブロンドの髪にすらりと長い脚。腰のくびれは『女子』の胸をさらに強調している。

金髪碧眼の容姿は日本人でないことを簡単に示している。そのせいか、Cカップぐらいの胸が否応なく際だって見えた。そして、若く瑞々しい肌には水滴が広がり、まるで宝石のように輝いていた。貴魅夜がここにいたら確実に警察が呼ばれていただろう。俺はそう思うことで現実逃避を図った。

でも、俺は逃げることができず、この女子がシャルルだったこと

を知ってしまった。

そして、シャルルの家族のことを……母のことを知った。デュノア社は俺と貴魅夜のデータを取るためにたまたま適応値の高いシャルルを男装させてここに潜り込ませたと……。そこまではまだ耐えられた。でも、シャルルの諦めたような笑いを聞いたときに俺は怒ってしまった。「それでいいのか？親が何だっというんだ。どうして親だからって理由で子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろう。そんなものは！」と、言ってしまった。そして、それは自分にも当てはまるので俺はシャルルを言い訳に吐き出していた。そして、シャルルに「ここにいろ」と言った。

俺が抛り所になればいい。不思議なことにそんな考えは微塵もなかった。俺はただ、そんな奴のところまでシャルルが苦しむところは見たくないと思ってしまったんだろう。だから、俺はここにいらつて言っただんだけだと思つて。

翌日、俺と貴魅夜は授業の前に敷地内を歩いていた。千冬姉とラウラの声を聞くまでは。

「一夏、異常性癖者の行動だぞ。盗み聞きは」

「そんなこと言つて、お前も聞いているじゃないか」

「俺は違う。ただの興味本位だ」

「性質わる」

ひそひそと、近くの木陰からその様子を見ていた。内容としてはラウラがこの学校にいないでドイツの軍隊に戻ってくれと頼み、それを千冬姉は断り、ラウラが走って消えていった。

「おい、その男子共」

「「げっ」」

「異常性癖は感心しないぞ」

「いえ、織斑先生。俺は一夏に止めるように「バシンッ」……………」

「つくなら、まともな嘘をつけ」

「それよりなんでそうなるんだよ。千冬ね……………」

バシーンッ

貴魅夜の時も長い打撃音が鳴った。

「学校では織斑先生と呼べ」

「はい……………織斑先生」

「さっさと授業に行け劣等生共。その調子だと一回戦落ちだぞ」

「……………はい」

「それと二人とも、廊下は走るな……………とは言わん。ばれな

いよいよじつ

「YES」

「了解」

俺と貴魅夜は千冬姉と別れ、ばれないように廊下を走った。貴魅夜は千冬姉に作られたたんこぶを冷やしながら。

俺は第三アリーナまで走っていた。セシリアと鈴がラウラ相手に戦っているらしい。俺はそれを止めさせるために走っていた。

途中、先生に捕まりかけたが逃げ切り、第三アリーナへ疾走していた。

「着いた！」

俺はドアが開くと同時に駆け込み、その試合の様子を見た。ラウラの姿は無く、少しボロボロのセシリアと鈴がいた。

「無事だったのか？」

とりあえず、見える位置まで移動すると状況が変わった。ラウラが無傷で現れ、暴虐が始まった。

「ヤバイ。あのままじゃ殺される」

「止めるおおおおおお！」

俺が声を出したとき、一夏は叫び、アリーナのシールドを破り侵入した。あとで怒られるが今は都合だ。俺は『黒式』をかざし、装着、《黑夜極型》でラウラに一夏、シャルルと共に斬りかかった。

ラウラは俺の動きを見きり、なにか見えない力で俺を抑え、大型力ノンで撃ちぬこうとしていた。

「やらせるか！」

「一夏、離れて！」

貴魅夜とシャルルの声が聞こえたと思ったら、シャルルがライフル二丁でラウラを撃っていた。

「ちつ……。雑魚が……。」

「それに俺も入るのか？ラウラ・ボ・デイヴィヒ」

貴魅夜は黑夜を振り下ろす。が、その動きは止まった。

「当然だ」

「そうか、ならこの邪魔な拘束には消えてもらわなきゃな」

貴魅夜はそう言つと、『絶極零夜』を発動させた。それにより、ふたたび動く手足。そして、斬撃。

「なに!？」

「一夏、二人は任せたぞ」

俺はシャルルと貴魅夜にこの場を任せ、二人の救出に向かった。

「シャルル、今だ!」

「わかってる」

俺とシャルルはラウラに防戦のみをさせていた。それほどまでに、俺とラウラの相性は悪いのだ。ラウラの乗る『シユヴァルツェア・レーゲン』の第三世代型武器、A I Cがある。相手の動きを止めるチートみたいな力があるが、それにはエネルギーが使われている。対して俺にはエネルギーに触れるだけで自分のモノにするワンオフ・アビリティ『絶極零夜』があるのだから優勢になるのは当然のことだ。

「さあ、寝てもらおうか。ヒヤッハー……………って、合わないな俺のキャラに」

俺はノリツッコミをしながらも、ラウラに向け、『闇の(・)刃』ダークネス
ブレードで斬りつけてやろうとした瞬間、第三者に止められる。織斑先生だった。

簡潔に言おう。俺たちは織斑先生のありえない力でISを止められ、

トーナメントで戦うことになった。というか、俺の攻撃くらって、平然と立っているあの人は本当に人なのだろうか？俺は違うと思う。だって、あんなのにISを持たせてみる、世界は破滅する。

そんなこんなで医療室。周りは女子女子女子。ええい、病人（けが人が正しいけど）いるから静かにしろや！

しかし、そんなことお構いなしに俺と一夏とシャルルは組もうと言い寄られていた。今は俺一人になったがな。一夏がシャルルと組むって言ったから諦めて、俺に向かってるって寸法だ。あとで何奢らせようか。

「ああ。聞いてくれ。俺はシエリルと組むから……」

うんっ、予想はしてたよ。でも、ここまで静かだと恐いな。いいだろ、好きな人と出たって。リア充がなんだ！って、意味わかんないなこれ。

「やっぱり、噂は本当だったんだ」

「はあ、男子と組めるのは専用機持ちだけか」

「皆の者、シエリルを袋叩きにするぞ！」

最後の奴は誰だ。アイツか、よしっ取り押さえておこう。

「み、みなさん。解散して下さい。織斑先生が来ちゃいますよ」

山田先生（いたんだこの人扱い）の脅しで今日は人が全員いなくなつた。

「んじゃ、いくか」

「おう」

「そつだね」

俺たちはこれから起こる戦いに備えて、部屋に帰って寝ることにした。一夏がいる部屋からはドガッって、音がしたけど気にしない。

第七話 ブルー・デイズノレッド・スイッチ（後書き）

かなり、要約して書いています。原作ベースといえど、原作のこと書きすぎたら、営業妨害やら、なんやらになりそうになんで許して下さい！

次は一夏&シャルル対ラウラ&篝です。お楽しみに。

御意見・御感想お待ちしております。ってか、送ってください。なおすべき点は改善しますので！

では、次回

第八話 ファインド・アウト・マイ・マインド(前書き)

さてやってきました二巻最終、一夏&シャルルVSラウラ&等。今回は貴魅夜の出番はあるのか？
そんなこんなで八話目スタート！

第八話 ファインド・アウト・マイ・マインド

六月も最終週に入り、IS学園は月曜から学年トーナメント一色へと変わる。その慌ただしさは予想よりも遙かにすごく、一回戦が始まる直前まで、全生徒で雑務、来賓の誘導を行っていた。

で、それらが終わった生徒はトーナメント表を確認しに各アリーナの更衣室へと走る。ちなみというか、当然というか、男子である俺たちはただっ広い更衣室を使っているわけだが。反対側の更衣室の熱気はすごいな。いろいろ大変そうだ（温度とかが）。

「しかし、すごいなこりゃ・・・」

ああ、本当だよ。お前の馬鹿さ加減にはほとんど呆れるよ一夏。お前が女子をあんなんにも獣にさせているんだからな。

「箒もかわいそうだな」

「なんか言ったか？」

その呆け顔をやめる。ああ、何か殴ってあげたいね。まあ、これを離すには少し昔に戻るが。

俺はISの点検を終えて、自室。まあ、一夏の隣部屋に向かっていた。そこで、箒の告白を聞いてしまった。だからって、『トーナメントに勝ったら一夏と付き合える』なんて、ほざいては無いぞ。俺の他にも聞いていた奴がいるんだろ、どうせ。

んで、試しに「一夏、箒と付き合うのか？」って聞いたら、「ああ、買い物ぐらいは付き合うぞ」だそうだ。俺は一発殴ってやりたかったね。こんな奴、全世界の女子の敵だよ。むしろ、殺した方がいい

とも思うね、それだと、色々代償があるから何にもしないが、唐変木の相手も大変だな。同情するよ、篝、セシリア、鈴。

「それより、予選表はどうなんだ？」

「そろそろのはずだよ。ほら」

「どれどれ……………」

「「「え！」「」」

一年Aブロック第一回戦 ラウラ・篝ペア対一夏・シャルルペア

「こりゃ、俺の出番はねえな」

「なんで？」

「シャルルは知らないのも無理がない。一夏は必ず、自分が戦う試合で何かしらのトラブルに巻き込まれる」

「なっ」

「否定できるか？」

「……………できないな」

「一回線目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりゃああなたによりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

試合開始まであと五秒、四、三、二、一 開始。

「叩きのめす」

俺とラウラの言葉は奇しくも同じだった。

試合開始と同時に俺は瞬時加速を行う。この一手が入れば戦況はこちらの有利に大きく傾く。

「おおおっ！」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出す。 来る。

「AIC?なんだそれ？」

「シュヴァルツエア・レーゲンの第三世代型兵器よ。アクティブ・イナーシャル・キャンセラーの略。慣性停止能力」

「ふーん」

「ちなみに一夏さん、PICはご存知ですわよね？」

「……知らん」

「あ、あのねえ……。基本でしょうが、基本！全てのISはこのパシブ・イナーシャル・キャンセラーによって浮遊、加速、停止をしてんの！」

『おお、どこかで聞いたことがあると思っただらそれか』

『あんたねえ……』

『わかったなら、夫婦漫才をやめろ。俺も噂を聞いたことがあるが、あそこまで完成しているとは思ってもみなかった』

『ほんとに何者なの貴魅夜（さん、って？』

『ただの男性ISパイロットだが』

『IS動かせる男（男性）はふつうじゃない（わよ）（ですわ）』

『で、あれはどうすればいいんだ？』

『AICも所詮はエネルギーを使った空間作用の一種だ。衝撃砲と同じな』

『つまり、零落白夜で切れると』

『基本はな、俺の絶極零夜でエネルギーを取りこめたしな』

（でも、ラウラのAICは斬れなかった。どうすればいいんだ）

『自分で考えなさい』

『……しもつともです』

結局は零絡白夜以外では対抗する手段は無いという結論が出た。それなら、それ以外の攻撃で攻める。意外性のある特攻だ。

「くっ……」

結局はそんな幼稚な作戦など見抜かれ、AICによる縛りが俺を前進も後退すらもさせてくれない。

そして、ラウラのカノンがこちらをロックする。でも、慌てない。なぜなら、今は一人じゃない。仲間がいる。

「させないよ」

シャルルの六十一口径アサルトカノン ガルム に^{バースト}爆破弾の射撃を浴びせた。

「ちっ……」

ラウラは舌打ちをし、俺たちから離れて行く。

「シャルルはすごいね。冷静で」

「そうだな。だが、俺はなんか引つかかるんだが……」

「なにが？」

シエリルに問われても正直分からない。いきなり現れた男性の操縦者。だが、矛盾点がいくつもある。まずは、何故今さらなのか。という点。そして、外国で男子でも学べるISの学校。これはかなり

おかしい、女性だけ（・・・・・・・・）ならまだ分かる。でも、男性も（・・・・・・・・）はありえない。

そして、最大の矛盾。デュノア家にシャルルという名前が無いという事。近くてもシャルロット・デュノアという俺たちと同じ年の女子だけ。

「シャルルは女なのか・・・・それとも名字を隠しているのか」

そこでは、ちょうどシャルルが箒を倒し、ラウラのワイヤーを斬り伏せたところだった。俺はシャルルが男であることを祈ったが、本能ではシャルル＝シャルロットで確定にされてしまっている。

そして、シャルルが女の場合に助ける手段が無いということに苛立ちを覚えていた。

「ふぁー、すごいですねえ。二週間ちよつとの訓練であそこまで連携が取れるなんて」

教師の身が立ち入りを許可された観察室に山田真耶と織斑千冬はいた。

「やっぱり織斑君ってすごいです。才能ありますよね」

「ふん。あれはデュノアが合わせているから成り立つんだ。あいつ自体は役に立つてはいない。それに才能だけなら神阪の方が上だ」

アイツは私たちが唯一、認めた奴の弟だからな。その声は聞こえることは無く、真耶はまた身内には辛口評価して。ぐらいにしか思

っていないのは幸いだっただろう。

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身すこいじゃないですか。魅力がない人間には、誰も力を貸してくれないものですよ」

「まあ・・・そうかもしれないな」

こうも年下の真耶に諭されるのは千冬としては少し悔しくもあるのだが、まあ、あいつもそうだったな。と思いなおす千冬の顔には少し厳しいものがあつた。だから、

「またまた、そんなに気にしないそぶりをして」

真耶の一言は千冬にとって、この上の無い鴨になったのは言うまでも無かつた。

155

「これで決めるっ!」

零落白夜を発動させた俺は、ラウラへと直進する。一瞬貴魅夜たちも見えたりもしてるが、俺の行動に呆れすら感じているようだ。呆れているなら、見返してやる。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが・・・それなら当たらなければいい」

ラウラのAICによる拘束攻撃が俺を襲ってくる。右手、左手、そして視線。目に見えない攻撃を急停止からの転身、急加速で逃れた。

「ちよろちよると目障りな・・・」

ラウラは逃げ続ける一夏に業を煮やしていた。立て続けの攻撃にワイヤーブレードも加わり、さらに攻勢が熾烈になっていく、だが、俺は一人で戦っているわけじゃない。

「一夏！前方二時の方向に突破！」

「わかった！」

射撃武器を使い、ラウラを牽制しながらフォローしてくれるシャルルがいる。つくづく組んでよかったと思うよ。もし、敵だったら十分持つかわからない。

俺はそれに感謝しながら、ラウラを射程範囲に捉えラウラへと突っ込んだ。雪片は地面に平行に構え、突っ込む。読みやすさは変わらないにしろ線より点の方が捉えづらい。捉えた！

「無駄な事を！」

無駄なこと？何を言っているんだ？ああ、忘れていいのか

「・・・ああ、なんだ。忘れていいのか？それとも知らないのか？俺たちはふたり組なんだぜ」

俺の後ろからシャルルの的確な射撃がラウラを襲う。そして、俺は気付いたんだ。A I Cの弱点に。

A I Cの弱点は、捕らえる対象に意識を集中させなければいけない事だ。だから他の事は全てにおいて隙だらけになる。A I Cに頼るだけだったら絶対に勝てないんだ俺たちにはな。

そして、雪片がラウラを捉える。

「なっ……！」

捕らえたと思った一撃が無くなっていく。エネルギー切れだ。

「くらいすぎてたのか、あと少しなのに」

一夏がラウラを斬ろうとした瞬間に刀身の光は消え、空しく一夏は地面にたたきつけられた。しかし、まだシャルルがいる。一夏たちの負けは決まってははいない。

「ラウラがトドメを刺そうとしてるね」

しかし、一夏にトドメを刺そうとしたラウラはシャルルの瞬時加速からの連射で動きが止まった。

「瞬時加速！」

その行動はこのアリーナにいる全員を驚かせていた。事実、俺も驚いていた。シャルルは俺たちと戦ってたときに一度も（……）瞬時加速を使ってないからだ。一朝一夕で手に入れられるはずがない。ラウラは懲りずにAICを使おうとするが一夏による射撃で動きが止まる。その際にシャルルは『盾殺し（シールドピアス）』でラウラを殴りたいや、突いた。

そして、シャルルの瞬時加速が突然だったようにラウラの変化も突然だった。

『許さない。教官を変えてしまつあいつを、私は、認めない、許さない、消してやる』

『ラウラ・ボーデヴィヒ!?』

聞こえたのは一瞬。だけど、俺は嫌な予感がしたためアリーナに降りた。ラウラのISがISの形を保たず、他の何かに変わるのを目視しながら。

「雪片・・・」

千冬姉がかつて振るつた刀。それに酷似していた。いや、似ているというレベルではない、まるで複製トレースだ。

俺は無意識に 雪片式型 を握りしめ、中段に構えた。

刹那、黒いISが俺の懐に飛び込んでくる。居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。それは紛れもなく千冬姉の太刀筋だった。

何度も見たから分かる。これは千冬姉の方を真似ているんだ、千冬姉だけのものなのにな!

「ぐっつ!」

雪片式型 が弾かれた。そして、黒いISは振り抜いた刀をそのまま上段に移し、二撃目が来る。

予想通り、落とすような斬撃が襲いかかる。身を守るものは俺の頭上に腕ごと弾かれた。受けきれない。そう、判断した俺は白式に後

方退避の緊急回避を行った。それは千冬姉の太刀筋を知らなければ完全には避けきれなかっただろう。

けれど、エネルギーが底をついている白式に、俺を守りきることなんてできなかつた。だから、左腕に切り傷が入った。そして、最後の力を使った白式は消えた。

「……がどうした……」

「ただ、俺には関係ない。」

「それがどうしたあああああ！」

俺は激しい怒りと共に拳を握り、黒いISを殴ろうとした。あと少しで届くというところまで来て俺は引きもどされた。

「馬鹿か！死ぬぞお前！」

一夏はほぼ錯乱していたかのようにラウラに殴りかかっていった。んな、馬鹿を放って置けるか。

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

「ふざけてんのはお前だ！一夏！いいか、お前は動くな！例え、白式があつても今のお前じゃ死ぬ！頭を冷やせ！箒、一夏を頼むぞ」

「わ、わかつた」

俺は一夏を箒に預け、ラウラとシュヴァルツエア・レーゲンだった

ものに向き直る。

「・・・嫌なもんだな、俺が追ってる者の手がかりになりそうなのに、壊すしかないなんてな」

俺は 黒夜極型 を中段に構える。そして、雪片を睨みつける。集中はしている。けれど、考えることは俺が倒してもいいのか？という迷いと、倒さなければならぬという義務感が心の中でないまぜなっている。

何分こうしていたのだろう。俺もISも動かず、ただある時が来るのを待つように立っていた。

「俺を信じるよ、箒。心配も祈りも無用だ。ただ、信じて待っていてくれ。必ず帰ってくる」

「一夏、最後の以外は聞いてはいなかったが、死亡フラグを立ててるんだぞ、お前。まあ、お前にやらせたかったんだからいいんだが」

「貴魅夜、さつきはありがとな。箒とお前のおかげで目が覚めたよ、じゃあ、倒してくる」

「行って来い。でも、さつさとしろよ」

俺は立ちあがってきた一夏を見て、こいつならやってくれるかと思いい。黒式を解除して、黒いISと一夏の決着を見届けることにした。

もう、強さを見誤ることは無い。力ではない強さを知っている。もう、迷わない。誰かを守るためだけに強くあり続けている人を俺は

知っている。誰よりも深く、知っている。
だからこそ、その人がそうだったように、俺も誰かのために強くなろう。絶対になつてやる。

「じゃあ行くぜ、偽物野郎！」

俺に呼応するかのよう　雪片弐型　はその刀身をエネルギー体に変える。

「零落白夜・・・発動」

ウン・・・小さく響き、すべてのエネルギーを完全無効する刃がその手に収まる。だが

(今回そんなにでかなくていいぜ。必要なのは速度と鋭さ。素早く振り抜ける、洗練された刃だ)

意識を集中させ、暗い闇の中で光る一束の光をさらに細く、鋭く、尖らせていく。

集中が頂点を迎えると、雪片の実態刃が無くなり、洗練されたエネルギーだけがその場に残された。今までの垂れ流し状態とは違う、零落白夜の日本刀。

「ありがとよ、白式。じゃあ、行くぜ！」

俺は先程の黒いISがやった構えをした。箒の構えを頭で反復する。千冬姉の教えを頭で反復する。その構えの名を『一閃二断の構え』。集中された間合いの中で敵が動くのが分かる、確かに動きは千冬姉かもしれない。だが、千冬姉の意思がないのならば

「ただの真似事だ！」

俺は刀を弾き、そのまま上段へ持ち込み、斬り捨てた。そこから出てきたラウラの弱々しい姿に俺の怒りは湧いてこなかった。ただ、優しく抱きとめ、この戦いは終わった。

「で、どうすんだよ。篝との件は？」

今、俺たちは食堂にいる。俺、一夏、シャルルの三人だけだがな。ついでにシェリルはセシリアと鈴の看病という名の監視だ。

「どうするって、何が？」

「付き合っつてことだよ」

「ああ、あれか。もちろんやるさ」

「・・・無事を祈る」

「なんか言っただか？」

「別に」

俺は一夏の楽天的な性格を、違うな、唐変木をどうにかしてやらなければならぬと感じた（おもに周りのため。残りは自分への負担を減らすため）。

「そういえば、篝。前の約束だけだよ」

ああ、聞かないでおこう。どうせ結果は分かっているのだから。箒：「理由を聞かせる」一夏：「当然だろ？ 買い物くらい」「ここらで箒が切れて、一夏がノックダウン。試合終了。

「ホント、一夏ってわざとやってるように見えるよね（な）」「

ここで俺とシャルルでトドメを刺す。でも、きっかり十五分後には復活したかな。

さて、寝るか。っと、山田先生・・・一夏に任せよう。

時は変わって、風呂場。

なんですか？ 山田先生が気を利かせてくれて、更に今日はボイラー点検が終わったからだよ。ついでにシャルルは入っていない。調子が悪いって、言ってるがそろそろ問い詰めるか。

「なあ、一夏」

「うーん」

「シャルルって女だろ？」

「ああ、って、ガボボボ、ゴホツゴホツ、な、なんで知ってんだよ！？」

一夏は気持ちよさそうに風呂に浸かってたが、俺の突然の発言でバランスを崩し、一時的に沈んだ。そのせいで言葉が軽くおかしい。でも、もう用は済んだから俺はあがるか。

「俺はあがるが、安心しろ。シャルルを、仲間を売るかよ。あいつの家庭は知ってたんだからな」

「ホント、サンキュー」

俺は脱衣所に出た。そして、シャルルが近くにいと仮定して動いている。だから、着替えはかなり早い。ほら、終わり。

「「あつ」」

脱衣所を出た瞬間にシャルルと出会う。体調は大丈夫か？と聞くと、うん、この温泉って、効能がすごいからさ。ぜひ入ろうかなって。と答えた。もう、言ってるか。

「いいのか？女湯はあつちだぞ、シャルロット・デュノア」

「な、なんで、・・・僕の名前を。まさか、フランスの・・・」

「違うな。俺はただ、国家に不正にアクセスしただけだが？それよりも、一夏と入るなんてな。まあ、あと二年半ぐらい頑張れよ。俺も手伝ってやつから」

「あ、ありがとう」

「じゃあな。っと、唐変木に惚れてんだろ？まあ、頑張んな」

それだけ言うと、俺は部屋へと戻っていった。シャルルは風呂場へとはいつて行くのを邪悪な笑みを浮かべたまま。

昨日は驚いた。シャルロットがいきなり俺がいると知ってる風呂場に入ってきて、抱きつかれて、お礼言われて、貴魅夜も知ってるって聞いて、転校生が来るし、なんか慌ただしいよな。しかし、シャルロットは遅いな。何してんだろ？山田先生も元気ないし。

「シャルロット・デュノアです。皆さん改めてお願いします」

って、え？なんでシャルロットが女のカッコしてんだ？それに、嫌な予感もする。

「一夏あつ！！！」

「貴魅夜あ！！！！」

ヤバイ、俺と貴魅夜の命がヤバイ。明日の新聞、俺たちの事で埋まるぞ。タイトルは『哀れ、ミンチの高校生男児』ってところか……言ってる場合じゃない。

「一夏！俺は先に逃げる。説明しても無駄そうだからな。くそつ、一夏だけなのになシャルルと入ったのは……」

おい、貴魅夜、置き土産の威力が高すぎるんですけど……ヤバイよ、これはやばいよ。

ついでに貴魅夜は窓からグラウンドに逃げた。二階とはいえ、よくやる。っていうか、女子が騒がなければ、鈴が来ることは無かったんじゃないあああああ。

そんな事を思っている間に衝撃砲は放たれた。

「はあはあはあ、よし、追っ手はいないな。やっと休める」

『まだ、駄目だよ』

「えっ？」

確かに声が聞こえた、でも、ここにはだれもいない。なのに、声が聞こえるなんて・・・疲れてんのかな、俺？

ドサツと、俺は芝生の上に寝っ転がり、そのまま眠りについた。傍らに少女がいたことにすら気付かずに。

第八話 ファインド・アウト・マイ・マインド（後書き）

追記：その後俺は織斑先生に見つかり、指導という名の地獄を見せられた。その後も地獄なんだがな。

やっと、二巻終わった。次は三巻、では、また。

第九話 レインメーカー（前書き）

いよいよ銀の福音戦編開始！

第九話 レインメーカー

「そういえば、そろそろ臨海学校だな」

「ああ、そうだな」

俺たちは今、私服姿でいる。なぜかという買い物だからだ。一夏はシャルロットと、俺はシェリルとで同じところに行くから付き合っている。

一方、シャルロットとシェリルは……ナンパされていた。

「ねえねえ、どこか一緒に行こうよ」

「二人じゃ大変でしょ」

「お断りします」

「僕もね」

今の二人の脳内ではナンパ野郎は六回は死んでいる。シャルロットは『ラピッド・スイッチ』で撃ち抜くとどうかなとか、シェリルは脳天をぶち抜けばどうなるかなど、おおよそ普通のの女子高生の考える事ではない。

しかし、バカはいるものでこの二人の態度を見て、何故か脈ありと感じたナンパ野郎は唐突にシャルロットの肩をつかまえようとした。しかし、そこは代表候補生。逆に腕を締め上げてしまった。

「いて、いて」

「止めてもらえませんか？きつい香水がついたら困るので」

「テ、テメエ」

ナンパ男はシャルロットを殴ろうとする。
まあ、ちょうどいいタイミングで一夏が後ろから殴ってくれる。

「俺の連れに何しようとしてるんだ？」

「なんだよ、おまえっ、ごぶっ」

「ホントだな。俺の女に手を出すなんて、死ぬ覚悟はできてるか？」

一夏、貴魅夜のおかげであっさりナンパ男は沈黙・・・無力化した。それを見たシャルロットは顔を輝かせながら、男の肩の関節を外した。

私は顔を赤くしたままでその光景を見ていた。

「つたく、気をつけるよな」

「あ、ああ」

俺とシエリルは一夏の後ろを歩いている。シエリルの話だと、たまにたま会って、そのまま一緒に待っていたらしい。そこで絡まれて、俺たちが来たらしい。

「まっ、怪我なくてよかったよ」

「あ、ありがとう」

俺はまた赤くなるシエリルを見て、ほくそ笑みながら、手をつなぎ歩いていた。

（貴魅夜たちは優しいな。さりげなく応援してくれてるし、距離も

離してくれてるし、僕と一夏の会話も邪魔してこないし、・・・恋愛の機微が分かってるよね。それに比べて一夏は・・・)

シャルロットはもう何度目かわからない溜息をつき、横にいる一夏を見る。

「そういえば、シャルロット」

「な、なにかな？」

「いや、みんなさ、お前がシャルロットって知ってるわけだし、この呼び方は特別感が無いからさ。その、何かあるか？呼んでほしい名前とかさ」

と一夏が、あの唐変木・オブ・唐変木ズ、一夏がそんな提案をしてきたのだ。シャルロットは少し思考が止まってしまったのは責められる事は無いだろう。

「だ、だめか？」

「い、いや、いいよ。でも、なにも無いからさ、一夏につけてもらいたいな」

「おお、いいぞ」

一夏は少し思案顔をしている間、シャルロットの脳内では三頭身シャルロットが踊りまくっていた。喜びのあまりにだ。

もちろん、提案者は貴魅夜だがそんなことは知らないし、考えないのは恋する乙女の盲目ともいえるだろう。

「じゃあ、シャル、でいいか？」

「うん、うん、いいよ」

(シャルか、これって特別視されてるってことでいいんだよね、

ね)

脳内で誰か分からないものに確認を求める始末である。後ろでは、内心ホツとしている貴魅夜がいるのは気付かれていない。

「水着売り場はここらしいな」

ちなみに女尊男卑の世の中なため、圧倒的に男性ものは少ない。まあ、そうじゃなくても女性物の方が多いいけどな。

「一旦、別れよう。後でここに来て、それから試着すればいいだろ？」

「いいよ」

「私も」

「じゃあ、行こうぜ貴魅夜」

そこで、一旦別れた。

まあ、男子は早いからな。俺も一夏もフォーマルなタイプの水着を一夏は青、俺は黒を選んだ。

予定よりは早いがまあいいか。

「あつ、一夏、僕の水着を選んでほしいんだけど・・・あと、貴魅夜、呼んでたよ」

「おお、いいぞ」

「わかった。行こうか」

俺は、あえて気付かないふりをした。IS学園の制服を着ているヲウラと私服とはいえ、殺気丸出しのセシリアと鈴たちを・・・。楽しむことが大切なんだ。他人の色恋沙汰も自分のもな。だから、

あえて無視。

「そのあなた」

「ん？」

一夏か、よかった。俺はこのうちにこっそりと横から抜けて、シェリルのところへ行くぞ。

上手くいったな。わるいが犠牲になってもらうぞ、一夏。

「わるい」

「ああ、貴魅夜。この白いのと水色どっちがいいと思う？」

「ん、ビキニタイプは男として見てみたいな。それに白は似合うと思うし、でも、その水色もいい気がするが・・・俺は白かな」

「わかった」

「俺が買ってやるよ」

「いいよ、申し訳ないし」

「気にすんなって、恋人におごらせて下さい」

紅くして、もじもじし始めたので、さっと、水着とシェリルの手を握り、レジまで連れて行った。

「あー・・・しゃ、シャル？」

「な、なに？」

「えーと・・・」

とりあえず、俺はシャルと一緒に更衣室にいる。無論脱いでいるのはシャルだ。

というか、密室で二人きりだし・・・ヤバイいろいろヤバイ。なん
でこうなってるのか、いろいろ聞きたいのに言葉が詰まっつてうまく
出ない。

「ん・・・」

ばさり・・・衣服の上に何か軽いものが・・・もしかして、もしか
すると下着なのか！？下着を脱いだ音なのか！？
うああああ、シャルは一体何を求めているんだ！

(うつうつ、勢いでこんな事をしちゃったけど、どうしよう・・・)

シャルがなぜこんな事をしているかという点、尾行に気づいたから
である。尾行とはもちろんセシリア、鈴、ラウラの三人の事である。
もちろん、軍関係者のラウラがいるのだから目視はされていない・
・貴魅夜以外にだが・・・それではなぜわかったかという点、IS
のコア・ネットワーク機能でわかったのだ。

元来、ISは宇宙で使うものであったため恒星間でもお互いの位置
が分かるようにしているのであった。だからこそ、調べればすぐに
座標が出てくる。

しかし、プライベートの問題から『潜伏モード』というのものもある。
これは一切のコア・ネットワークに映らない機能だ。もちろん三人
はこれを使っている。

だからこそ、シャルはわかったというのは皮肉なことだが。

『潜伏モード』にしている「見られたくない状況にある」尾行して
いると結びつけたのである。

(でも、さすがに同じ個室で着替えはやりすぎたかなあ・・・)

その後も変な子に思われてないだろうかなど悩んではいたが、無事に着替えを終え、シャルは水着を一夏に見せた。

「ど、どうかな・・・?」

「お、おお。いいんじゃないか!にあつてると思うぞ!」

おおよそ、女性を喜ばせるセリフではないが二人とも混乱していたので関係なしである。

「俺は先に出てるからな」

更衣室のドアを開け・・・開けると・・・そこには山田先生、貴魅夜、シエリル、そして千冬姉がいた。

そして、絶叫。

俺は生きて帰ることをあきらめた。

「とんだ一日だな」

「まあいいよ、初デートだし」

一夏と俺は別れ、今はちよつとしたレストランにいる。そもそも、デートなので代金は俺が全部払っている。当然だろ?

「にしても、織斑先生まで来てるとはな」

「そうだな、あの、その、楽しみか?」

「んっ?なにが?」

俺は真正面の席に座っているシエリルに少し意地悪な笑顔を浮かべ

ながら聞いた。ちなみに窓際だったために一夏たちが帰ったのが見受けられた。

「その、私のみ「テメエら、全員手え上げる！」なんだ？」

「いまだきいなそんな強盗だな」

男が三、女が五・・・武器はサブマシンガン五丁か・・・。ISを起動させれば早いけど、ここフォークとナイフで遊びますか。

「シエリル、動くなよ」

「しかし・・・」

「あいつら、人質を取って無いんだ・・・一気に決めるさ」

ナイフをくるくる弄びながらそれだけ言って、遊んでたナイフを投げた。

「なっ!?!」

慌てて避けるが、俺の存在には気づいてない。なら、

「今時、古いんだが・・・」

「なっ、なん・・・」

テーブルを使って跳躍、蹴りをかまし、男を一人沈黙させる。その間、誰一人動かないのでとりあえず男を先に眠らした。

「で、投降するか？」

「はっ!誰が!」

「そうか、女はあんまり殴りたくないんだけどな」

「はあっ、女はこの世で一番強いんだよ!リヴァイブ!」

そういうと、女性全員がISを纏っていた。

「IS・・・何処から盗んだ？」

「教えるかよ！死ね！」

「はあー。仕方ないか」

俺は窓を割って外に出る。ちなみに四階だ。落ちたら即死だろう。それは、ISを持ってなければただけだな。

「いくぞ、『黒式』」

面倒だから、ISスーツなしの通常展開。それでも、十分勝てるがな。

「な、なんだと。ISだと・・・」

「あれ、知らない？世界で二番目にISを使える男の名前・・・神阪貴魅夜だよ」

俺は一気に決めるため瞬時加速を使って、手前にいたリヴァイブを一気に斬った。それだけじゃ、墜ちるはずはないけどな。

「やれつ、打ち殺せえ！」

「やれやれ、こんな街中で暴れんなよ・・・アバズレが」

武器を 黒天 に切り替え、矢を射る。それだけで、前にいた奴らを墜とす。そしてそのまま、残りの二機に向かい、 黒夜 を振りかざす。

「来るなあー！」

「んな、弾が当たるかよ。こっちはIS学園で毎日その機体と戦ってるんだからな！」

一閃。これで終わったな。

「解除して、つと、大丈夫だったかな。シエリル」

俺は下にいた人々とデパートの人々からの惜しめない拍手と共に『黒式』で元いた店に戻り、犯人を一塊に縛り、シエリルを探した。いや、実際には俺に飛び込んできた。なんか、肩がふるえている・・・俺、何か悪いことしたかな？

「シエリル？」

「・・・した」

「えっ？」

本当にか細い声で聞こえない。でも、涙声である事はわかった。

「心配したんだよ！」

悲鳴のように・・・シエリルが叫ぶ。俺は、鳩が豆鉄砲を食らった顔になっていただろう。

「窓から、出て行って・・・もし、もし！ISが起動しなかったらどうするのー！」

「・・・か、考えてなかった」

「バカ！・・・でも、無事で、よかった」

ああ、またかよ。また泣かしてしまった。くそっ、どんだけ駄目なんだよ俺は！

俺は悔しさで歯ぎしりしていた。でも、その前に、言う事が、あるだろう。俺には。

「ごめん、ごめんな、シエリル。心配してくれてありがとう」

「……次したら、許さない。絶対だから！」

「ああ……わかった」

シエリルは俺の腕の中で泣き続けた。俺にはそれを受け止めることしかできなくて、歯がゆかった。改めて、自分が無力だと悟った気がしたんだ。

「神阪、グラウンドを三十周して来い」

「えっ？」

「いけ」

「いや、な、なんでですか？」

「いけ」

「……わかりました」

IS学園に帰った途端に俺は織斑先生にグラウンドを走らされた。もちろん、ISをつけての、しかも、補助なしのな。

「はあああ、なんなんだよ！ちくしょー」

俺の叫びは誰もいないグラウンドに響いただけだった。

第九話 レインメーカー（後書き）

次回、みんなで臨海学校。

ご意見・ご感想お待ちしております。

第十話 海にいたら十一時 オーシャンズ・イレブン（前書き）

久々の更新です。

大変長らくお待たせしてスイマセン！

読んでくれている人たちへは本当に感謝をします。

復帰話なので、駄文なのはご容赦ください。

えっ？その前から駄文だろ？って、知ってますよそんな事。それよりも酷いかもしれないから、最初に謝っておきます！

第十話 海についたら十一時 オーシャンズ・エレブン

とある廃屋・地下

「やっと、来たな。貴魅夜」

男は億劫そうに、画面に映る青年を見ていた。その目にはもはや正気など無き様にも見えた。

男はそつとISのコアを掴み、それを弄びながら見ていた。

「束は、どうするのかな？まあ、俺の事を忘れさせたままか、思い出せるかはあいつ次第か……」

それだけ言つと、男は全ての電源を消し、そこから消えていった。

「おお、すごくきれいな海だな」

俺たち、IS学園の生徒は今、臨海学校で海にきています。昔の「トンネルを抜けるとそこは……」みたいな感じにトンネルを抜けた先には陽光を反射し、穏やかに波を立てる海岸が存在していた。

「にしても、金遣い荒いなIS学園……」

「まあ、臨海学校は表向きで実際は実地訓練の様なものだけだね」

「そうか、ならいいか」

これから起こる事件の事も知らずに俺たちは呑気だった。それはこの事件に根幹から関わる事になる一夏たちも同様だった。

「……よろしくお願いしまーす」「」

バスは無事に旅館、『花月荘』に辿り着いた。

千冬姉は俺たちの担任なので知り合いらしいその女将は三十半ばぐらいで職業柄笑顔が多いのか多少若く見えた。

「あら、こちらが噂の……？」

ふと、俺と貴魅夜と目があった女将が千冬姉にそう尋ねる。

「ええ、まあ。今年は二人男子がいるせいで浴場分けが難しくなってますって申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子たちじゃありませんか。しっかりしてそうな感じを受けますよ」

「感じがするだけですよ。神阪は不純異性k「していません！」まあいいか、挨拶しろ、馬鹿者ども！」

それだけ言うと、千冬姉は俺と貴魅夜の頭をぐいっと押さえられる。いや、今しようとしたんだって。本当に。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「神阪貴魅夜です。よろしくお願いします」

「うふふ、ご丁寧にも。清州景子です」

そういつて女将が丁寧にお辞儀する。その動きはとても気品のあるもので、こういう大人な女性に耐性のない俺としては少し緊張してしまふ。

「不出来の弟と生徒でご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生つたら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので」

「……………俺の理由は？」

いや、それほどでもないと思うんだけども、しかし事実な部分もあるので否定はできない。ああ……………早く千冬姉に迷惑かけない大人になりたいものだ……………。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所が分からなければいつでも従業員に聞いて下さいまし」

女子一同は、はいと返事をするすぐさま旅館の中へと向かう。とりあえずは荷物を置いて、そこからなんだろう。

ちなみに初日は終日自由時間。食事は旅館にて各自取るようにと言われている。

「ね、ね、ねー。おりむ、かみぎ」

ぐあ、この呼び方はまちがいないのほほんさんだ。振り向くと、例によって異様に遅い移動速度でこっちに向かってきていた。眠たそ

うにしている顔は、たぶん素。

「ふたりとも、部屋どこ？一覽に書いてなかった。遊びに行くから教えて〜」

その言葉で周りの女子が一斉に聞き耳を立てるのがわかった。しかし、俺たちの部屋なんか聞いてどうするんだ。面白い事は何もないぞ。たぶん。

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

「わー、それはいいね〜。わたしもそうしようかなー。あー。床つめたーいって〜」

「でも、俺たちの部屋って面白いか？」

「お前の言いたい事はなんとなくわかったが、それはきっと間違いだ」

当然ながら、俺たちは女子と一緒に無いらしい。

いや、それは嬉しいんだが、場所まで書いていないとなるといささか不安だ。

「織斑、神阪、お前たちの部屋はこっちだ。ついてこい」

おっと、千冬姉のお呼びだ。待たせるのは忍びないので、俺と貴魅夜はのほほんさんに「またあとで」と言い、別れた。

「えー、織斑先生。俺たちの部屋はどこになるのでしょうか？」

「黙ってついてこい」

「いきなりの封殺ですね……」

貴魅夜の言及は即殺された。ちなみに旅館の中はかなり広く、キレイだ。一学年全員を丸々収容する事にも驚きだが、内装も情緒がある趣と最新設備がみごとに違和感なく混ざっていた。適度に聞いたエアコンは心地よい、廊下ですらひんやりしているのがたまらない。「ここだ」

千冬姉が指したのは『教員室』とあった。

「ここだ」

織斑先生は教ここが俺たち教員室を示して、俺たちの部屋だ、と言

った。

「織斑先生、ふざけているんですか？」

「いや、私としても不本意だが、お前たち二人を個室に入れても就寝時間を無視した女子が入り込むのは目に見えているだろう。ならばと、教員室にしたのだ。まあ、私なら変な事が起こるはずなんじゃないからな」

「……………そうですね。見た目はいいのですが……………。性格が……………すいません！口が過ぎました！」

だが、織斑先生は俺の言葉を聞く前に……………バシーン。

一発、俺を殴った。その痛みはいつも異常に重かった……………いや、理由はわかるんだが、酷過ぎる。

俺は叩かれた頭をさすり、もう部屋の事には関係しないと決めた。

「一応言っておくが、一夏、ここでは私たちはあくまで教師と生徒だぞ」

「はい、織斑先生」

まあ、目の前で行われている姉弟の仲睦まじい光景を見る気にはなれず、俺は俯いていた。

ただ、自分でもわからないほど悲しくなる、いや、わかってはいるつもりだ。

その原因は目の前で姉を殺された事なのだろう。

わかっている、わかってはいる。でも、今でも整理がつかない。

何故、俺がその事を忘れて、いままで生活していたのかを……………思い出せない、いや、覚えているはずなのに記憶が無いような感覚だ。

俺は軽く溜息をつき、部屋の中へと入った。

「貴魅夜、大丈夫か？」

「んっ？なにがだ？」

いつも通りに笑顔を浮かべる貴魅夜に、俺は何故か不信を感じた。こいつはいつもそうだ。なにもかも俺より優れているのに、そして苦しんでいるのに、頼る事をしない。

まるで、男装していた時のシャルの様だ……それもなんとなく違うか？とにかく何かを抱えていることは明白だ。

「なにか、悩んでいるのか」

「なんだよ、唐突に……」

「なんとなく、なんとなくだけど、わかるんだ。昔からそういうのは……」

「……俺より、あの五人をそれでなんとかしろよ」

んっ、小さくて聞き取れなかったが、俺に関わる事だった気がする。

「なんか言ったか？」

「いや、で、悩みがあるとしたらどうするつもりだ？」

「……何も考えてなかった」

「……プツ、ハハ、ハハハハハハ。やっぱり、一夏は面白いな。つか、気にすんな、大丈夫だからさ」

貴魅夜は笑いながらも俺を見て、それが嘘でない事を示した。

俺はそれで満足した。

でも、貴魅夜がまた苦しむ事になるのを俺はこの時、知ることができなかった。

しばらく、花月荘の廊下を歩くと地面から跳び出ている……うさ耳？を発見した。

「これって……まさか……」

「なんなんのか知ってるのか？」

「ああ、恐らく束さんだ」

束……俺が知る限りでは一人しかいない、ISを造った超天才、篠ノ之束博士だ。

「なんで、ここに？」

「知らん、なあ、引き上げていいか？」

「いいんじゃないのか、放っておいたらかわいそうだよ」

「だな。よし、って、のわっ！」

一夏はうさ耳に力を入れ、引き上げようとしたが、どうやら土に篠ノ之博士が埋まっているわけではなかったようなので、盛大にコケル。

たまたま通りかかったセシリアを見上げる形で倒れてしまった。

「セ、セシリア……」

「セシリア、今回はこいつにも理由があるんだ。だから、許してやれ」

セシリアは俺たちの言っている事を理解していないのか、怒ってもいない……まあ、すぐ気付くとは思っけど。

一夏がいる位置……つまり、セシリアの足元だが、そこを何回か視線を交差させ、それに気づくと、途端に赤くなる。

「い、一夏さん……」

「南無、一夏」

「い、いや、だから、うさ耳が……」

セシリアはわなわなと震えて、こちらをキッと睨んでいる。

まるで、蛇の目のようだった。

俺が心の中で一夏に黙祷を捧げていた時、急に、キイイイン。と音がした。

「……?」「……」

どこからか、何かが飛来してくるような音が……って、ここに、飛来!?

ドガアアアアア。

暴風、そして、地面に刺さったデフォルメの人参?

「な、なんだよ、これ」

「……に、にんじん……?」「……」

ここまで言つと、にんじんが二つに割れ、中から人が出てきた。

「あはははは、引つかかったねいっくん」

「篠ノ之、束?」

「……束さん」

「ところで、篝ちゃんは？まあ、どこにいようが、私の篝ちゃん探査機で一発だけどね」

そして、篠ノ之束はこの場を荒らすだけ荒らして逃げた。

それにしても、この庭、誰が責任とるだろう？先生？国か？

まあ、細かいところは任せるとして、俺たちはしばし呆然としていた。

（海）

俺と一夏は簡単に着替えを済ませ、浜辺に来ていた。

と言っても、一緒だったのは一瞬だったが……。んっ？一夏はって？ああ、セシリアに拉致られたよ。可哀そうに（笑）

まあ、俺はそこらへんぶらぶらするだけで一日を過ごしました。

と言いたいのだが、そうは問屋はおろしてくれない。

俺は、何故か、後ろから頭を殴られた。

「なっ……」

急激に失っていく意識の中で見たのは、なにもない青空だけだった。

千冬は外を見ながら考えていた。

（本当に、アイツの記憶を戻していいのか、束）

昔、束以外に仲良くなった女の子の弟。千冬は唇を噛み、頭を振った。

（考えすぎだ。アイツは大丈夫だ）

そう思い直した千冬は数少ない休憩時間を愚弟の用意した水着を着ようと決めた。

「いつてえー」

俺はうめきながら、立ち上がるうとした。

したんだけど、身体が縛られて動かない。って、なんでだよ！

「やあやあ、しゅうくん久しぶり、元気してた」

「篠ノ之束……」

「そうだよ、ホントに久しいね。記憶は無いのかな？」

「なんの、話だ」

俺は睨むだけしかできなかった。

束はその間にも嬉しそうにそこら辺を跳びまわりながら、何か機械を持ってきた？

「なんだよ、それ！」

「束さん、秘伝の装置だよ、まだ未完成だけだね」

「ざけんな！俺を離せ！」

「それは、これで取り戻しても言えるのかな？」

「わけが……」

「わからない？でもね、そんなことも言っていていられないんだよね。」

しゅうくんには早めに記憶を取り戻してもらわないとね」

そこで、篠ノ之束は言葉を止め、静かに言った。

「死ぬだけだしね、しゅうくん」

俺が覚えていたのはここまでだった。

神阪貴魅夜としての記憶は……。

ザザァー。

潮の満ち引きの音。

「って、またここかよ」

俺は一回目にここに来た時の事を思い出していた。

「秋、おいで」

「うん、姉さん」

いや、まて……秋夜って誰だ？

俺の記憶のはずだろ、これは……じゃあ、俺は一体誰なんだよ。貴魅夜って誰なんだよ？

姉さんは秋と呼ばれた男の子の手を引き、歩いていた。

そして、俺は叫んでいた。

「俺は、誰なんだよ！姉さん！」

届かない、届くはずのない問いを俺は姉さんに向かって叫んでいた。届くはずがないのに……俺の姉はまた目の前で殺されたのに……。

「えっ？姉さん、ねえ、さん」

あの時の情景が繰り返された。姉さんが死んだ、いや、殺された日の、俺の、秋夜の記憶が無くなった瞬間が……。

「秋、お前は貴魅夜だ」

「えっ、兄さん？何言ってるの！？姉さんが大変なんだよ、早く助けてよ！」

「やっぱり、バカだな、貴魅夜。お前が、姉さんを殺したんだろ？」

「ち、違うよ。僕は……」

「「神阪貴魅夜だよ」」

そして、俺が憎むべき相手の名をつけられた時の瞬間を……。

俺は、俺と、姉さんは、実の兄に、弟に、殺されていた事実を見せつけられた。

そして、そこで映像が途切れた。

「あつ、ちーちゃん。しゅうくんなら、記憶が戻ってるはずだよ。

話してあげなよ、しゅうくんにいつくんとほつきちゃん、それに私たちのことをさ……私は私でやる事があるしね、じゃあね、バイバイ、ちーちゃん」

束はそれだけ言うと、電話を切った。

私は本当に束に神阪秋夜の事を任せて良かったのだろうか？もしこれで、彼が誤った方向に行ったら……いや、考えて無駄だろう。

私は、ひと足早く旅館へと戻った。

（ここは……？束さんは……？）

俺はそんな事を思いながらも立ち上がった。どうやら、拘束具はもうないようだ。それ以前に旅館へと俺は戻っていた。

なんだか、キツネに包まれた気分だったが、俺は織斑先生を探そうと部屋の引き戸に手をかけようとしたら、先に開いた。

「神阪、いや、秋。大丈夫か？」

「あつ、はい、大丈夫です。織斑先生」

俺は『千冬さん』というのを押しとどめ、なんとか返事をした。

「うむ、大事が無いのならいいんだ。ほら、さっさと浜辺へ戻らんか！一夏たちもお前がいなくて心配して居ったぞ！」

「えっ？」

「返事は」

「は、はい、いつてきます！」

俺は浜辺へと走り出した。なんか、もうどうでもいい気がし始めたからだ。俺が誰だろうが、俺は俺だ。それ以外の何者にもなれないのだから。

今は、今だけは、過去を忘れ、楽しもう。俺はそう思い、一夏たちのもとへと走って行った。

「やっぱ、今を楽しむのは無理そうだ」

俺は一夏たちが見えるテーブル席で飯を食っていた。そして、俺をこんなにも悠つにさせているのは、当然と言ってもいいのか？一夏だった。

また誤解されるようなセリフや言動が目立つ。あいつは少しは成長しようと思わないのか？俺はその一点にだけ疑問を抱き、呟いていた。

「「やっぱ、可哀そうだ（だわ）」」

奇しくも横にいるシエリルと共にだったが、それは僥倖だったと思う。

やっぱ、俺はこういうのんびりした生活が好きなんだなあ〜と、心底思えるからだ。

のんびり、彼女と話すって大切だと思うし……って、友達も言ってたから。

俺は、その幸せを横にいる

「何をにやにやしているんだ、貴魅夜？」

前言撤回、こいつと二人で噛みしめるにはまだ早いようだ。

「そういえば、どこに行ってたんだ？昼間は？」

「ああ、ちよっと、そこらをブラブラしてたら、足攣って、旅館で寝てたんだよ」

俺は、咄嗟に嘘をついた。それをジト目で見られてはいるけど……無問題のはずだ！

「そう、ならいいけど……浮気してたら、」

シエリルにしては珍しい赤く染まった頬で

「ISでメツタ刺しにするからね」

「ぜってえ、しない！」

怖いって！マジ何これ？久しぶりにもほどがあるよ。千冬先生以来の悪寒が俺に走ったよ。

俺は、冷や汗が流れる顔でしないと、そう答えた。

そうして、一日目は過ぎていった。

一夏と俺は波乱を巻き込みながらだけど……。

第十話 海にいたら十一時 オーシャンズ・イレブン（後書き）

突然の名前チェンジ。

何というか、あんまりに適當すぎたんで直しました。

やっぱ、主人公にそれらしい名前がいいかと！

ああ、でもこれはもともとは『銀色の福音』戦が終わってからかうと思ったんですけど、仕方なしに書きました。

それでは、不定期ですが次回で！

第十一話 その境界線の上に立ち シン・レッド・ライン

合宿二日目。

俺こと神阪秋は、まだ早朝の砂浜にいた。

そよぐ風が心地よく頬を撫でていく。

俺はある決心に来たんだ。

仲間を守る？違う。復讐を果たす？違う。誰かに涙を流させない？違う。それを考え出したのは神阪貴魅夜だ。

だから、神阪秋はこう誓おう。全ての事に諦観を持ってはいけな
い。二度と諦めない。と……。

合宿二日目は朝から実習。

のほずなのだが……専用機組は浜辺の奥に連れてこられた。
そして、箒までそこにいた。

「これから専用機持ちにある任務を与える」

「ちよつと、待って下さい。箒は専用機がありません」

「それは……」

「それなら」

「ちーちゃ~~~~~~~~ん！」

この声……

「東さん！」

そう、ISを創りだした希代の天才篠ノ之東が崖を楽々と駆け降り、
千冬姉に……千冬姉のアイアンクロ で捕らえられた。

相変わらず、啞然とさせられる光景だ。恐らくIS的何かをつけた
東さんを素手で受け止め、そのまま宙に持ち上げる我が姉、千冬姉。
誰も知らない人が見たらある意味シュールな状況だろう。なんせ、

『不思議の国のアリス』のうさぎとアリスが混ざった恰好した東さ
んがいつものサマースーツを着た鬼の形相の千冬姉に顔を変形させ
られそうな勢いで掴まれているのだから。

しかし、束さんはそれをすり抜け、箒へと向かった。

「やあやあ、箒ちゃん。またおつきくなっただね。胸が」

「殴りますよ」

もうなんか、説明するのも面倒だが……箒が束さんを日本刀の鞘で殴った。

皆も啞然としてるし、ってあれ？

「貴魅夜、なんで頭抱えてんだ？」

「……………」

「おーい、貴魅夜」

「んっ、ああ悪い一夏。なんだ？」

「ああ。いや、やっぱいいよ」

「そうか」

「おう」

違和感。口では表せない程の違和感。俺はその時、それを貴魅夜から感じていた。その違和感が後に戦いを引き起こすとも知らずに……。

(……………にしても、相も変わらずだな。束さん)

俺は昔の記憶と比べ直して、そう思っていた。

今は箒のIS『紅椿』の運転テストを見ていた。ついでに言っておくが、あれは第四世代らしい。

あと、一夏の武器《雪片式型》と俺の弓《黒天》もそうらしい。だから事実上、第四世代はここに三機ある。

というか、色々適当すぎるし、スペックも高すぎる。あれ？なんでわかるんだろ？まあ、いいや。

そこまで考えたところで《雨月》と《空裂》のテストが終わったよ。うだ。

なら、

「織斑先生。肝心な事を聞きそびれています。俺たちはなんで呼び出されたのでしょうか？」

「ああ。それを今から説明する。が、これから話す事は国家レベルに関わることだ。それを踏まえて聞け！いいな！」

「『はい！』」

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働に会ったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代軍用IS『銀色の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域から離脱したとの連絡があった」

「一つ、いいですか？」

「いいぞ」

「そのISは、無人、なんですか？」

「そうだ。最悪破壊していい」

おかしい。よく考えてみる。ISは人が乗らないと起動しない。無人でも動く機体はいくつかあった。前に来た襲撃機『ゴレーム』なんかがそうだ。だが、無人化されているなら、なぜ、誰も公表しない？

そして、もう一つ。なぜ、今、このタイミングで？アメリカとイスラエル共同開発なら、監視用の機体もあつたはずだ。それを突破してきた機体を何故、俺たちに任せる？普通に考える。

代表候補生と代表では力の差は歴然だ。それを突破してきた機体相手に、専用気持ちだからって理由で、死ねというのか？

ああ、ダメだ。考えても答えが見つからねえ。

俺が一人で考えていると、横にいたシエリルが話しかけてきた。

「どうした、難しい顔をして」

「ああ、何でもない」

「以上だ。それでは、織斑、篠ノ之、そして神阪でいいな」

「えっ？」

「わかりました」

「はい」

何か知らんが俺は巻き込まれたらしいな。

こっそり溜息をつき、皆の後を追った。

俺と箒、貴魅夜はそれぞれのISを点検していた。

貴魅夜はシェリルと一緒にだ。なんか、少しムカつくのはなぜなのだろうか？

俺はセシリア（他多数含む）から教わった高速戦闘のレクチャーしてもらった。

だからこそ、俺は負けられない。
にしても

（箒の奴、大丈夫かな？なんか、浮ついているっていうのか？そんな感じだ）

俺は準備を終えたのでそんな事を考えていた。まあ、貴魅夜もいるし、フォローぐらいはできるだろう。

しかし、甘かった。俺たちはその後、負けるのだから。

『織斑、神阪。篠ノ之は浮かれている。が、上手く頼むぞ』

「はい」

さて、出陣か。作戦（あの後、山田先生を問い詰めて聞いた）通りだと終えは一夏、箒のフォローだ。

簡単はずだ。

だが、嫌な予感がしてならない。

「では、行くぞ」

「おう」

「わかった」

俺、一夏、箒は飛び立った。大幅に俺が遅れて。

（速い！）

紅椿は俺と黒式を後方遙かに置いて行ってしまった。
つて、バカか！

俺もスピードを上げて追いかける……
はずだった。

『敵認証。ロックされました』

「なっ！」

俺は横から襲われた。

いや、別にそこまではいい。

でも、相手が……

『機体名』

「『 黒式』」

そう、俺の機体だった。

なんで？黒式は一体のはず。他に、ないはず。姉さんの機体は、俺が直接……いや、あれさえも植えつけられたものなのかよっ！

「 秋、死んでもらおう」

そして、俺の邪魔をする奴なんて決まっている。

「死ぬのは、アンタだ！兄さん！」

俺は黒夜をコールし、斬りかかった。

貴魅夜が、いない！？

「 箒！」

「わかってる！だが、今は福音が先だろう！」

そうだ。だから、俺は零落白夜を発現させ、瞬時加速で一気に間合いを詰めて、斬り込んだ。

だが、福音はそれをスラスターを器用に使い、後方へ避けた。

（一度、体勢を いや、このまま押し切る！）

どうせ、避けられる間合いじゃない。だから俺は一気に決めにかかった。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》、稼働開始」

「！？」

オープンチャンネルを通して聞いた声は抑揚がない機械音。なのに、明らかな敵意を感じ、俺は少し恐怖を感じた。

そして、それは本当に訪れた。

俺の攻撃は数ミリ程度の正確さですべて避けられた。さすがは国家機密レベル。

だが、負けるわけにいかない。

焦ってしまった。

それを福音が逃すはずも無く俺の大振りの攻撃は避けられ、代わりにスラスターからの連続砲撃を受けた。

「ぐうっ！」

福音の弾は触れるだけで爆発するエネルギー弾。それだけならどんなに良かった事か。

（それに加えて、この連射性）

高い精度ではない。だが、圧倒的な数を一瞬で生み出し、さらに一撃で装甲をえぐっていくエネルギー弾は驚異的すぎる。

（貴魅夜は、どこなんだっ）

しかし、思ったところで助けは来ない。ならば、

「箒、左は頼む」

「任せろ！」

いる奴同士で何とかするしかないだろ。

俺と箒はいまだ連射を仕掛ける福音に対し、二面攻撃を仕掛けた。

だけど、俺たちの攻撃はかすりもしない。スラスターの実用レベルが半端なく高いせいで俺たちの攻撃は当たるところか、カウターの手立てになっている。

「一夏、私が動きを止める！」

「わかった！」

言うなり、箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り出す。しかも、腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギーを飛ばし、攻撃を仕掛ける。

（こっちの機体も化け物だな……！）

そして、展開装甲を使つての自由自在の方向転換、急加速には福音も防御をし始めた。

「はあああっ！」

いける！

そう思い刀に力を入れる俺だが、そこには福音の全面反撃が待つて

いた。

「La……………」

甲高いマシンボイス。聞こえた刹那、ウイングスラスタはその砲門を全て開き、その数実に三十六。しかも、全方位への一斉連射射撃。

「やるなっ……………！だが、押し切る！」

箒が光弾の雨をかわし、迫撃する。隙が、できた！

だが、人生、上手くはいかない。

福音の放った光弾の一発は一隻の船へと向かって、進んだ。

俺は、唯一のチャンス捨て、光弾を追いかけた。

「うおおおっ！」

瞬時加速、零落白夜の両方の最高出力を使い、光弾をかき消した。

「何をしている！？せつかくのチャンスに」

「密漁船だ！くそっ、先生たちが海域も閉鎖していたはずなのに

」

だからって、見殺しにはできない。

「なぜ、そんな奴らを庇う！」

「箒！」

「!?!」

「悲しい事言うなよ。お前は、力を持った瞬間に弱い、力を持たない奴らの事が見えなくなっちゃうのか？そんなの、全然らしくない。箒らしくねえよ！」

箒は、崩れ落ちた。刀は消え、顔を腕で覆い隠している。そして後ろには

砲門を箒に向ける福音！

「間に合えええ！」

最後の力を使った瞬時加速。酷く世界が遅く感じる。福音の光弾が放たれた。俺は一発目が届く前に箒へとたどり着く事ができた。

箒を抱き、光弾を全てくろう。

もともと、枯渴しかかっていたエネルギーをすべて使った瞬時加速だ。

絶対防御すらもつない。

俺の体はミシミシと音を立て、肌が焼けていった。

それでも、篁を守りながら……。

海へ、落ちた。

最後に見たのは、海面に映る福音だった。

俺は兄さんと切り結んでいた。

「はあっ！」

「ふっ！」

黑夜と黑夜、黒式と黒式。同じ力を持つ同士がぶつかっていた。

「ふむ。さすがに、俺の弟だな」

「うるさい！俺はテメエの弟じゃねえ！」

かすかに笑う兄さんに対し、俺は激昂していた。

元々の任務なんてもう忘れていた。

俺は、こいつを殺せば、もういい。

「今度はこっちから、いくぞ」

兄さんは瞬時加速で俺に向かってきた。それを俺は真正面に受けず

に剣の切っ先だけを刀の身で流し、そのまま斬り込んだ。

だが、それは左手で止められた。

兄さんは俺が後ろに流した刀を引き戻し、俺の首へ刃を向けた。

なんとか、首を下げそれを避けきると兄さんは刀同士をぶつけ距離

を取った。

だが、間合いを開けさせるほど俺はお人好しじゃない！

今度はこっちから瞬時加速し、一気に間合いを詰めた。

だが、

（笑っている？）

兄さんは不敵に笑っただけだった。

と、途端に腹に衝撃が入る。

今度は、黒天の射撃だ。だけど、

「黒天は……エネルギー体だけを壊すんじゃ……」

「ふつ。無知だな。そんなもの戦場で使えるか？」

兄さんは俺を嘲笑しながら、それだけ言った。説明する気はないよ
うだ。

だが、まあいい。

「ようは、当たらなければいいんだよな」

「できるのならな」

やってやるよ。

俺は黒夜を低く構え、また間合いを詰め始めた。今度は兄さんも刀
で止めた。

ギリギリと音が鳴る刀身。それを俺は怒りの形相で兄さんはつすら
笑みでそれぞれ、ぶつけていた。

今度は弾かせねえし、逃がしもしねえ。

刀を押し切り、更に猛攻を始めた。しかし、それで勝てるはずもな
い。

「やはり、つまらんな」

「!?!」

俺は蹴られていた。

それだけはかるうじてわかった。だけど、

(見えも、しなかつた)

態勢が崩れた。兄さんがそこを逃すはず無く、斬撃が襲う。どんど
ん、エネルギーが、無くなっていく。

「な、めんなつ！」

やっと、反撃した時には百も無かった。

「……………」

「相手にならん。これで終わらすか」

兄さんは刀を腰に当て、抜刀の構えを見せた。

悪魔で抜刀の構えだ。そこからどう来るかはわからない。

だから、

「無刀か……バカが」

それだけを残して、消えた。

いや、そう見えるぐらいのスピードで移動しただけだ。
俺は目をつぶった。視界は無駄だ。なら、感じるしかない。

来る！

横薙ぎの一撃を止めた。

だが、二撃目が後ろから入った。

いや、正確にいえば。俺はただ二撃目を防いだだけだ。

一撃目は見事に絶対防御を貫き。俺の体を斬っていた。

(しぬのかよつ。こんな、ところで……)

俺は海へとゆっくりと落ちた。

第十二話 雪羅・焰閻 ドツレシイ・ホワイトノサマール・ブラック

それは秋と一夏、そして篤が小学校二年生の時だった。

もちろん、秋は一夏、篤の事をよくは知らなかった。あのときまでは……。

「おい、男女。今日は木刀持ってないのかよ」

「……竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよな」

「……………」

「しゃべりかたも変だもんな」

女子は答えない。

秋はそれをたまたま通り過ぎた時に聞いていた。

（また、あいつらか……）

秋は溜息をついていた。

なぜなら彼もまたバカにされた一人だからだ。

『秋ちゃん、男の女の子の秋ちゃん、チンチンついてんのか？』

『はあ、うるせいなあ。少しだまってくれない？』

『いつもいつも、男みたいに話しちゃってよ。実は女の子なんだから？』

『どこをどう見たら、そう思えるんだよ？』

『はっは、その名前とかそうだろ？秋？なんてださい名前付けてもらっちゃってさあ、ってぐあっ』

『うるさいって言うてんだろ。それに俺はな、姉さんや兄さんが必死になって考えてくれた名前を、名前を、バカにされるのが一番ムカつくんだよ』

秋は胸倉をつかみ、バカにしてきた奴の一人を壁に叩きつけた。でもまあ、いろいろ問題があつて、その後は無視してきたわけだが……。

（女の子一人を囲んで、か……性根がねじ曲がってやがる）

少し、身体に教えてやるうかと思いい、その教室へ入ろうとした時、男の子の声が出た。

「……………うっせーなあ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

外から見ていた彼は驚いた。自分みたいな奴がこのクラスにいたのか。と。

大抵人間、特に子どもというのは人の事を悪くいう傾向が強い。自分が言われるのは嫌なのに……………。

彼らは知ってか知らずか、そんな理からは外れていた。他人を、自分より尊重してしまう。そういう、そんな役回りの人間なのだ。だが、そういう人間ほど異性には事欠かないというのはある意味この二人、特に織斑一夏を見ればわかる事だと思ふ。

秋は、彼、織斑一夏がいれば大丈夫と思ひ、教室から離れた。

翌日、一夏とその家族が先生に呼ばれたのを見て、まるで自分の鏡映しだと少し笑っていたのは秋以外は知りもしない事だった。

「……………」

今、旅館に臨時に配備された医務室では織斑一夏と神阪貴魅夜もとい神阪秋が眠っていた。

二人とも重傷でかれこれ三時間は意識が戻っていない。

一夏の横には箒、秋の隣にはシエリル。

どちらも何も喋らない。だが、シエリルの存在自体が箒にとっては言外に責められている気がする。

秋は『福音』との遭遇前に他の敵勢力と接触、敗北。敵勢力はその後逃走。と、表向きにそうなっている。

だが、あの時、秋がいれば、恐らく『福音』は撃破できただろう。それぐらい、白式と黒式の攻撃力は高い。

この二人は今回の作戦の鍵だった。それが分断、各個撃破された現場での唯一の軽傷者の箒は多大な責任を感じていた。

だが、箒が責任を感じていても、千冬は、

『織斑と神阪を手当てしておけ！私は作戦室に戻る。お前らは命令が出るまで待機だ！』

冷徹その物だった。自分の肉親が重体なのに、だ。箒を責める事もしない。彼女はただ漠然と事実だけを受け止めていた。そして、一番苦しんでいたのだろう。

「……………箒」

重々しい空気の中、シェリルは口を開いた。その口から出るのは怒りか悲しみか……………箒にはどっちだって良かった。ただ、自分を責めてくれさえすれば、自分を否定してくればそれで良かった。

だが、彼女の口から出たのは意外な言葉だった。

「ありがとうね」

「……………なにを、言っている？」

「貴魅夜を、助けてくれて、ありがとう」

「……………」

「箒、自分ばかり責めて、前を向かないの駄目だよ。一夏だって、きつと、そう言うよ」

(一夏が……………言ってくれるのか？こんな、力におぼれた私に……………?)
箒は、信じる力を失っていた。彼女が持つ、唯一絶対の力ISは、強過ぎる。それに呑まれた彼女は、もう、昔の彼女じゃない。

だが、そうしていられる時間はもう、無い。

「私はもう、戦いたく……………」

「っざっけんじゃないわよ！」

鈴が病室の前に立っていた。いや、鈴だけじゃない。セシリア、シヤルロット、ラウラの合計四人が立っていた。

「何が戦いたくないよ！アンタのせいで一夏がこうなった！わかってんの！？他勢力を引きつけてくれた貴魅夜もボロボロになってる！それなのに、アンタは何？被害者ぶってんじやないわよ！このっ、臆病者！」

「……………だって」

「私だって、戦える！でも、敵の場所もわからない！戦えるのなら、

戦いたい！」

「やっと、やる気になりましたわね」

「そうだね、いつもの筈だ」

「場所などはもうとっくに調べはついている。あとは、戦うだけだ」

「行こう、筈。戦いに」

手を差し伸べてくれる人、筈はもう一度戦う事を決意した。救ってくれた仲間のため、そして、一夏のために……。

白い砂浜、白いドレス少女、鳴り響くさざ波の音。

目を開けるとそんな光景だった。ここは何度も来た世界。だが、今回は一夏も一緒だった。

お互いがお互いを認識できないが……。

そんな中、一夏は彼女を見つめていた。別段話しかける気もなく……彼女の歌を、踊りをただ聞いていた。

たいして、秋は何度も来た世界のはずなのに、驚きを禁じ得なかった。

一度も、この場所には出てきていない少女。彼女がそこにはいた。

「ねえ、あそぼ」

「あつ、おい！」

それは美しい鈴の様に透き通って声で、だが、どこかで聞いた事のあるような声の主と共に砂浜を駆け回されていた。

「……………」

海上二〇メートル。そこで胎児のように静止していた『福音』は自らの頭部を守るように翼で覆っていた。

？

ふと、何かに気付いたのか福音の顔が上がる。

次の瞬間には爆炎に包まれる事となったが……。

「初弾命中。引き続き砲撃を行う」

手慣れた操作で弾を取り換え、弾を撃つラウラ。今のラウラは砲戦

パッケージの『パンツァー・カノニア』を装備していた。だが、そんな武装でもやられるほど福音も暇でも阿呆でもましてや寛大でもないし、弱くもない。福音はラウラの予想を上回るスピードで接近を始めた。

最初は五キロもあつた距離が次の瞬間には一〇〇メートルをきるほどまでのスピード、そして、そこからのさらなる加速。

ラウラが一人だったら確実にやられていただろう。

しかし、

「セシリア！！」

ステルスモードのセシリアの特攻、それにより攻撃は防がれた。セシリアはブルー・ティアーズに『ストライク・ガンナー』という高機動パッケージをつけている。そのため、ピットは出せないが新たなライフルで攻撃を繰り返す。

『敵機B確認、迎撃に移ります』

「遅いよ！」

「遅い！」

セシリアの背中に乗ってここまで来たシャルロットと高機動パッケージを搭載したシエリルが現れた。

シャルロットはショットガンを二丁、シエリルは一つの銃に銃身が五つ付いた『バルカン・ベレシア』という銃、二丁で背中を完全に狙い撃ちした。

それでバランスを崩す福音。

しかし、倒すにはまだまだ至らない。それに

『優先順位変更。この空域の脱出を最優先とする』

この戦場から逃げようとした。しかし、その企みも海中から出てきた篤、鈴の攻撃で失敗した。

鈴は新たな、衝撃砲『山嵐』の連射を福音に立て続けにくらわした。しかし、それでもまだ倒せない。それどころか……

「銀色の鐘、最大稼働 開始」

両腕を広げ、踊るように空へ舞い上がる福音。そしてそこから、圧

倒的なエネルギーの雨が箒たちへと降り注ぐ。

「箒！僕の後ろに！」

シャルロットは防御用パッケージ『ガーデン・カーテン』を用い、前回の失敗を考慮した結果、展開装甲の自動防御化を失くした箒の盾となった。

だが

「それにしても……これはちょっと、きついね」

防御専用パッケージだったとしても圧倒的な火力を誇る福音の攻撃に耐えるのは至難の技だった。

そうこうしているうちに物理シールドは一枚破壊されている。

「ラウラ！セシリア！お願い！」

「言われずとも！」

「お任せになって！」

後退するシャルロットに対して、ラウラは砲撃を、セシリアは高機動からの狙撃をそれぞれ行う。

そして、

「足が止まればこっちのもんよ！」

鈴の衝撃砲、双天牙月の猛攻でついにとつかやっとなつか、羽が落とされた。その代わりに鈴も福音に墜とさせられたが……。

「よくも鈴を！」

「鈴！おのれッ　！」

そこへシエリルと箒が突っ込む。シエリルは射撃、箒は近接押され始める福音、そして

（獲った　　！！）

箒の刀は福音の右肩をえぐり　切れなかった。

それどころか、刀を掴み、箒へ砲撃をくらわそうとする。

「させないっ！」

エネルギーが集まる羽、そこへ弾丸が降り注ぐ。それも数多くの、全部で十四のある砲口から放たれるエネルギー弾。それは砲撃パッケージ『グラント・ピリオン』（プリーモ）の砲撃。

当たり前のようにエネルギーは爆ぜ、箒には当たらない。

そして、箒は、かかと落とし……展開装甲で刃を作ったまま福音に叩きこんだ。

静かに、福音は沈んでいく。

しかし、それは、終わりでは、無かった。

誰もが、価値を宣言しようとした時に、福音が落ちた水面が光を放ち、そこから福音が飛びあがる。

最初あったようにうずくまる福音。そして、福音から湧き上がる敵意。それに気付いた各ISが緊急信号出すがもう遅い。

福音は第二形態セカンドシフトをした……。

「んっ？」

いつの間にか、一夏の方では少女の歌が終わりを迎え、秋の方では少女の動きが止まった。

「行かないや」

「時間だから」

それだけの言葉を残し、二人は消えた。

そんな光景にびっくりするも二人は近くにある流木のベンチに座った。

「力を欲しますか……？」

「え……」

振り向くと？白？の騎士がいた。顔は見えない。

だけどそれは、一夏がよく知っている人に思えた。そして、ほんのちよつと昔、秋に尋ねられた言葉を聞き、それに一夏は迷わずに答えた。

「仲間を守りたい、助けたい。理不尽な世界で一緒に戦う仲間を守る力が欲しい」と……。

そして、白い少女に手をひかれ、彼はまた戦場へと旅立った。

「力を欲しますか……?」

「……当たり前だ」

「何故……?」

秋に質問したのは? 黒? の騎士だった。

そして、突然の質問に秋は頭を掻いた。答えは出ているようなものだが…… 何か足りない。そんな気がしたからだ。

だが、彼は今わかる事だけを口にした。

「他人を守るため…… それに、もう誰かを悲しませないため…… あとは、自分のためかな?」

「……」

「俺は、誰かを守りたい、悲しませたくない…… だけど、そんなもんは甘つちよろい幻想だつてわかってる。でも、そんなのを見過ごせる程、俺は弱くも自分保身にもなりたくない。ただ、それだけだ」
「じゃあ、いきなさい」

「……姉さん?」

秋と同じく黒の髪、それをセミロングのストレートにした女性。今は立派なスーツを着ている。

顔立ちは人懐っこさを伺える優しげな面持ち。

かんざかゆきな
神阪雪奈本人だった。

「あなたを待っている人がいますよ。秋」

「でも……」

俺は弱い。そう言おうとして、雪奈の言葉で遮られる。

「もう、二度と、負けないでね。あなたはブリュンヒルデが認めた数少ない騎士の弟なんだから」

そして、黒式が秋に渡される。

いや、これは違う。月を覆い隠す太陽。

サマル・ブラック
『闇焰』。

それが神阪秋の、黒式の在り方。夜をも照らす黒き光……。

それが答えだと悟った瞬間、彼もまた戦場へと舞い戻った。

先程まで激戦が繰り広げられていた場所に立っていたのは、福音だ

けだった。

そしてその福音は箒の首を持ち上げ、《銀の鐘》で包み、倒そうと
していた。

そんな中で箒が考えた事は

会いたい。

一夏に、会いたい。

すぐ会いたい。今会いたい。

ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……」

知らずに声が漏れていた。でも、それは叶わない願いだとは思って
も、言わずには居られなかった。

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

イイイイイインツ……！！

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

福音は荷電粒子砲に撃たれ、後退する。そこへさらに一閃が入る。

「おまえに……」

「俺たちの仲間は……」

「誰一人としてやらせねえ！」

そこには白式第二形態・雪羅を纏う一夏と黒式第二形態・闇炎で駆
る秋の姿だった。

やっと目が覚めた二人を出迎えたのは千冬だった。

千冬は今まさに飛び立とうとする一夏と秋に声をかけて起きたかの
だった。

「馬鹿者ども！覚悟はできているな」

「千冬姉、千冬姉が止めても俺は行くぞ。絶対に！」

「千冬さん！許可を！」

「……わかつている。任務は簡単なものだ。福音を止め、あの馬鹿
者どもを連れ戻してこいっ！」

「「はいっ！」」

そうして、一夏と秋は飛び立った。

その後ろ姿に不覚にも昔の自分と友人を見ているようになってしまったのは仕方のない事なのかもしれない。それでも千冬は、考えていた事を否定した。

（あいつは死んだ。私と束のせいで……雪奈は……）

結局、千冬は唇を強く結び、無事で帰って来る事を祈った。

「秋！少しだけ頼む！」

「わかった！」

秋は近接特化武器《焰獄黑夜》を構えた。

福音は新たな機体のデータを見ているのだろう。だけど、そんなのは新しくなった黒式には通用しないのだった。

その場から消えた。そう錯覚するほどの瞬時加速をし、秋は福音の背後を捉える。しかし、福音もそれに反応したのだろう秋のいるところを的確に翼で包む。

そして、翼は一気に輝き、数多のエネルギー弾が秋を撃ち抜いた。

「なめるなよ……銀の福音！」
シルバリオン・ゴスベル

ヒュン。

しかし、秋と黒式は傷一つついていない。それどころか先程秋を包んでいたのと逆の翼を斬り裂いていた。

どうしてそんなことができるのか？と聞かれれば彼はこう答えるだろう。

まずは瞬時加速で黒式の残像を作り、そこにエネルギーを多少置く。そして、残像が消える前に《焰獄黑夜》で作り出せる高温で塵気楼を見せる。無人ISはエネルギーと姿を目標としているもだから、それを逆手に取った技。

……だが、それを一発目で死ぬかもしれない戦場で使った秋も色々な意味で規格外といえるのだろう。

それを受けても尚、平気で翼を回復させ襲いかかって来る福音も十

分規格外だろうが……。

「いいのか？そんなバカみたいに突っ込んで来て……」

秋は迫りくる福音に何も構えもせず、ただ飄々と立っているだけ。

そして、今まさに福音が秋に掴みかかろうとしたその時、秋の横をエネルギーでできたクローが福音めがけて襲いかかる。

「一夏が来るぜ……お前へのリベンジでな」

使用者の意思一つで様々な形態に変わる一夏の新武器、雪羅。そのクローが福音を斬り裂いた。

（秋？秋って貴魅夜のこと？）

シエリルは来てくれた嬉しさよりも驚きが上回っていた。秋は確かにほとんど致命傷に近い傷を受けかろうじて生きているのが不思議なほどだったのだ。それなのにISに乗り、助けに来てくれた。

そしてなにより、彼の名前について……神阪秋。

それは彼女の恩師である女性の弟と同じ名前……その人は弟にISを渡し、それが廻り廻って私のところまで来た。

それが、？黒式？

「秋……勝つて」

そう、呟いた。

「はあああああ！」

「てえああああ！」

一夏が雪片と雪羅を振るう。秋が黒夜で斬りつける。だが、どちらかの攻撃が微妙な時間差で避けられるため、決定打は生まれない。それどころか、福音は自らに翼を纏い、光弾をあたりにまき散らす始末。

それを一夏は零落白夜のシールドで、秋は絶極零夜のシールドで仲間を守りながら戦う。

だが、

（これじゃあエネルギーが最後まで持たない……）

恐らく、一夏も零落白夜の使い過ぎで動けなくなるだろう。

秋も消費を少なくするために小さい盾のようにシェリル達の前に配備しているが、自らと離れすぎた盾ではエネルギーを吸収できるわけではないので……実質、ギリ貧状態なのだ。

しかし、このまま負けるわけもいかないわけで……

(こうなったら、やってやる！)

秋は捨て身で特攻を仕掛けに行く構えを見せるのだった……。

(一夏が駆けつけてくれた……！)

秋の事が抜けているのは恋する乙女の盲目というところで勘弁してもらいたい。

そして、それはもう、嬉しいを飛び越えていた。

心が躍動する。熱を持って、跳ねる。

そして戦う一夏の姿を見て、何より強く願った。

(私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！)

強く、強く願った。

そして、それはそのまま、紅椿の展開装甲からあふれる紅い光から黄金のエネルギーをあふれさせ、紅椿が立ち上がる。

『絢爛舞踏』、それが箒の唯一仕様の名だった。
ワシ・オフ・アヒリイティ

「一夏！三十秒だけ稼いでくれ！」

「応！」

一夏と秋はいまだに福音を捉えきれなかった。

一夏のエネルギー残量は二〇、稼働時間は残り約三分。

秋のエネルギー残量は一二〇、稼働時間は残り約一八分。だから、この一撃にかける。

一夏の零落白夜の光刃がかわされる。

それと同時に動きだす。

「くらえ！福音！」

ダブル・イクニッション

二段階瞬時加速でスピードを途中で一段階上げ、迫る。

だけど、それだけで終わりじゃない。

「『瞬時加速・零』！」
イグニッション・ゼロ

そこから急停止、抑えきれない強力なGが体にかかり、肺から空気が押し出される感覚と共に身体が悲鳴を上げる。

急に止まった秋に対して、福音は冷静に翼を広げ光弾を放とうとする。

しかし、それも計算通り……新たな技『瞬時加速・幻想』
イグニッション・ミラーージュの布石にすぎない。

それを見た周りにいた者たちにはこう見えた秋が、黒式が、二つ急に現れたと……

その技の原形はあの時、兄に負けた時の技……圧倒的な速さで自分を斬り伏せた技。

今は、秋の技としてそこにある。

そして、福音の翼は斬り裂かれ、秋は後ろを確認する。

技の途中で見えた、一夏と篤……そして、雪羅のク口 を掲げ、福音に迫る一夏。

決着はついた。

IS学園、一年生専用機持ち全員を苦しめた『銀色の福音』はもう動かない。

第十二話 雪羅・焰閻 ドゥレシイ・ホワイトノサマル・ブラック（後書き）

次話からオリジナルに入っていく予定？です！

感想、評価お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4686u/>

IS D A R K ~ 黒騎士伝説 ~

2011年12月11日23時48分発行